

文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業
オープン・リサーチ・センター整備事業（平成 17 年度～平成 21 年度）
なにわ・大阪文化遺産の総合人文学的研究

Kansai University Research Center for
Naniwa-Osaka Cultural Heritage Studies
Occasional Paper **No.9**

地域連携企画第 4 弾

平野をさぐる

2008 年 10 月 5 日・26 日

関連企画「大阪を探検しよう！」

地域連携企画第 4 弾「平野をさぐる」

鼎談「杭全神社と平野のはなし」

藤江正謹 鶴崎裕雄 北川 央

留学生写真コンテスト



地域連携企画第4弾

平野をさぐる

2008年10月5日・26日



◆写真コンテスト受賞作品◆

●関西大学賞

「神社―人々が集う場所―」

アレクサンダー・バット



●なにわ賞

「多彩」

アレクサンダー・ブシエー



●MUSEUM賞

「人々の願いがすべてかなう」

宋 潤珉



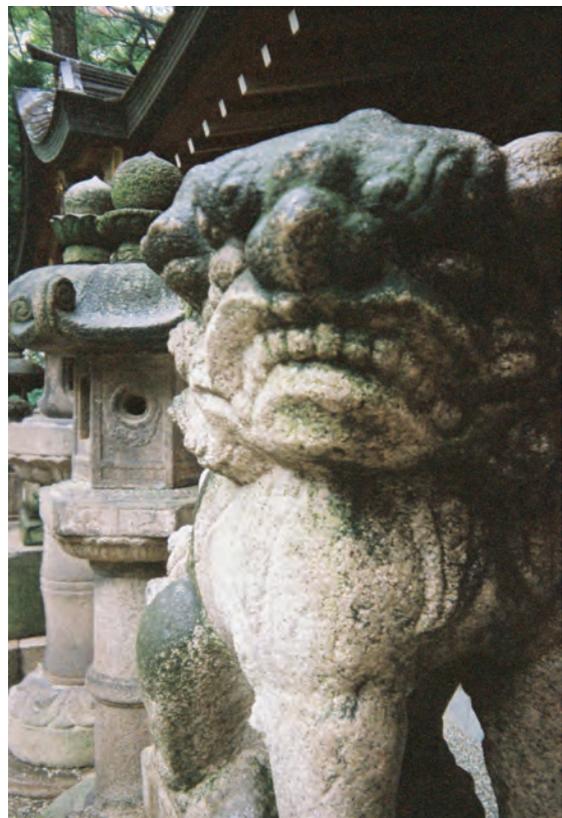
●平野賞



「Will you find the way to look at this picture ?」 ファイザ・ブッダール



「どこまでも続く大阪の道」 マリア・ゲーデ



「こまいぬ」 トリンカ・クロフォード

ご あ い さ つ

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターは、文化遺産の調査・研究を通じた地域社会との連携を活動の大きな柱とし、これまでも平野の地域の方がたより多大なご協力をいただいてきました。

4回目を迎えた地域連携企画は、2008年10月5日と26日に、「平野をさぐる」をテーマとして、昨年と同じく平野の地で開催いたしました。今回は、これまで培ってきた平野との関わりをもとに、「伝統の継承と異文化交流」というコントラストから、平野の文化遺産のおもしろさをお伝えすべく企画いたしました。

5日には関西大学の留学生を案内し、平野の町を写真におさめてもらいました。また、26日には平野にゆかりの深い先生方による鼎談、留学生によるスピーチ、写真コンテストを行ないました。両日ともに多くの方がたにご参加いただき、大盛況でした。

本書は「平野をさぐる」の報告であり、当日の様子に加え、留学生や学生ボランティアによるレポートも掲載しています。

最後に、本企画の開催にあたり、ご協力をいただいた皆さまに対して、心より御礼申し上げます。

2009年6月

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター
センター長 **高橋隆博**

例言

●本書は、2008年10月5日・26日に大阪市平野区で開催された、地域連携企画第4弾「平野をさぐる」の報告書である。

●本書の編集は、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター特別任用研究員の内田吉哉^{よしや}、リサーチ・アシスタントの中尾和昇^{かずのり}、石本倫子^{みちこ}、影山陽子が行なった。

●参加者の所属・年齢は当時のものである。

地域連携企画第4弾

平野をさぐる

目次

ごあいさつ	
関連企画「大阪を探検しよう！」	9
各班の報告	10
留学生レポート	16
地域連携企画第4弾「平野をさぐる」	27
鼎談「杭全神社と平野のはなし」	28
スピーチ「留学生の見た平野」	44
留学生写真コンテスト	47
学生ボランティアの声	49
地域連携企画を振り返って	52
編集後記	

関連企画「大阪を探検しよう！」

2008年10月5日（日） 平野郷（大阪市平野区）

成熟した「地域」と向き合う悩み

中世以来の都市、平野。その歴史を守り伝えようとする住民の意識は高く、実際に「平野・町ぐるみ博物館」を核として地域活性化が成功を収めている地域である。

果たして、これまで地元の方がたが地道に積み重ねた活動に見合うものを、私たちセンターから、改めて地域へ還元できるだろうか。私たちに何か新しいものが見えるのだろうか。

そうしたなかで、私たちの目ではなく別の目で見ると、というアイデアが生まれた。「見る」客体を探すのではなく主体を変えるのである。先入観をもたず、素直に地域の魅力を見出せる目である。

こうして、先入観や予備知識の少ない「日本に来たばかりの留学生」が平野を遠足し、その時に撮った写真のコンテストを地域連携企画当日に行なう、という基本コンセプトが固まった。

留学生を招く

地域連携企画は「平野・町ぐるみ博物館」（第4日曜日に開催）に合わせて10月下旬となり、その2週間前に遠足を開催することにした。関西大学の留学生受け入れは一般的に9月下旬の秋学期からであるため、留学生が関西大学に到着するのとはほぼ同時に案内と募集をするというタイトなスケジュールとなった。

国際交流センターに全面的に後援していただき、最初のガイダンスの場で、広く案内と募集をさせていただいた。おかげで申込にも混乱はなく、定員を上回る応募となった。9月29、30日の事前説明会では「平野・町ぐるみ博物館」MAP（56頁）を配布してレクチャーを行なった。

実施にあたり、最も配慮したのは留学生の安全である。そこで、往復はバス移動、現地では班行動、全員が名札を着用することにした。そして、留学生を十分にフォローする日本人スタッフの募集に対して、国際交流センターボランティアからも8名の学生が参加してくれた。

10月5日

当日は雨。遅刻1名、欠席3名。とはいえ、ほぼ予定どおりに関西大学を出発。車中では、留学生全員に使い捨ての簡易カメラを配布して、使い方を説明した。

到着後、A～Fの6班に分かれて、午前の自由行動および写真撮影に出発した。現地の本部としては全興寺^{せんこうじ}の集会施設「おも路地」2階の広間をお借りした。昼には、各班で一旦本部に戻って昼食をとり、このときカメラを提出。食後は再び自由行動とし、その間に提出してもらったカメラを現像に出した。

今回の企画に快くご賛同くださったのがミナミカメラ平野店で、28人分の写真をわずか2時間で現像してくださった。おかげで、留学生は撮ったばかりの写真をその場で見る事ができた。

出来上がった写真の中からコンテスト応募作品を選び、写真のタイトルと選んだ理由、遠足の感想などを、なるべく日本語で、簡単なレポートにまとめてもらった。

日本人スタッフとも相談しながら、懸命に書きあげる姿も見られ、一日が終わる頃には留学生同士も随分と打ち解けており、帰りのバスは、朝よりもリラックスした雰囲気に満ちていた。



(石本 倫子)

各班の報告

ありのままを体感する

P.D. 櫻木 潤

A班

〔留学生〕

アナスタシア・グバール (25歳・ロシア)

セシル・ブルー (22歳・フランス)

金東 (24歳・中国)

アレクサンダー・バット (21歳・イギリス)

宋潤珉 (25歳・韓国)

〔学生ボランティア〕

竹位 奈都美 (文学部4回生)

野口 晴加 (法学部1回生)

今回のフィールドワークで心掛けたことは、「ありのままを見て、ありのままに体感してもらう」ということである。余計な説明はなるべく省き、先入観なしで平野を見て感じてもらう。型通りの日本案内は平野の町には似合わないし、日本に来て間もない留学生が何に興味を示すのか、私にとってもそれがカルチャーショックを体感することになると思ったからだ。

バスを降り立ち、まずは全興寺に向かった。境内を一巡した後、杭全神社へ。境内では、拝殿前の狛犬に関心を示す者、門前にずらっと並んだ寄進者の名前に興味を示す者、それぞれが自身の関心のままにカメラ片手に境内を探索していた。一同空腹を訴え、少し早めの昼食をとり「おも路地」に戻る。途中、亀乃饅頭に立ち寄り、饅頭に挑戦してもらった。

昼食を済ました後、雨脚が強くなったこともあり、商店街をぶらぶら。「和菓子屋さん博物館」にある落雁の型を熱心に見入っていた様子は印象深い。その後、「おも路地」で、ケン玉・独楽など、昔ながらの日本の遊びに興じた。こちらが舌を巻くほどあつという間にコツをつかんでケン玉の技に挑戦する者、独楽まわしの紐に悪戦苦闘する者、女性は折り紙など、それぞれが熱心に取り組んで

いた。もちろん私も引率者であることを忘れて一緒に楽しんでしたが、こうした昔ながらの日本の遊びを留学生に教えてくれたのは、平野の子どもたちであり、平野の方がたであった。思いがけない国際交流になったが、教わる留学生、教える平野の方がたのどちらもがとても真剣で、それぞれがいい顔をして楽しんでいる光景は忘れることができない。



ケン玉遊びに夢中になる留学生たち

時間を忘れるほど熱中していたが、午前中の写真が出来上がり、レポートの作成となった。それぞれの選んだ写真を見ると、私には思いもよらない視点のものあり、選んだ理由にもわれわれとは異なった感性のものあり、と驚きの連続であった。

「ありのままを見て、ありのままに体感してもらう」という試みは、少なくとも私にとって多くのカルチャーショックを与えてくれ、来日間もない留学生の目線や感性は刺激的であった。写真を選んだ理由を、言葉でどう表現していいのかわからないと悩んでいた彼らの姿に、文化遺産とは、案外、そのような言葉で表現できないものの中にこそあるのではないかと感じた。



熱のこもったレポートの作成

平野の文化遺産に出会って

R.A. 藤岡 真衣

B班

〔留学生〕

韓 一瑾 (25歳・中国)

ファイザー・ブッダール (22歳・フランス)

アレクサンダー・ブシェー (21歳・アメリカ)

クレア・マザーソール (20歳・イギリス)

〔学生ボランティア〕

鷺見 素直 (文学研究科博士課程前期課程2年)

松本 友希 (文学部1回生)

茅本 愛子 (文学部1回生)

B班は、午前中に全興寺、商店街、大念仏寺、かたなの博物館、亀乃饅頭をまわり、午後は平野映像資料館、杭全神社を散策した。

全興寺では、本堂や灯籠を写真におさめる留学生の熱心な姿がとても印象に残った。また、お地蔵様や水掛不動に手をあわせる地元の方の様子も、彼らにとっては関心の一つであったようだ。全興寺から商店街に出ると、店先の商品やその並べ方にも興味を持った。店に飾られた商売繁盛の護符に気づくと、どのような意味があるのかという質問もあり、彼らにとっては商店街の景観も日本文化の一つとして感じられたようである。大念仏寺へ向かう途中、いくつかの寺院を通りかかると、門前のたたずまいや瓦の形に関心をもち、それに見入る姿が印象的だった。大念仏寺を訪れると、まず広い境内を散策した。本堂では法事が行われている最中で、経が読み上げられる声に留学生はしばし耳を傾けていた。「かたなの博物館」の見学では、日本刀の製作技術や飾られた刀について質問する場面がみられた。亀乃饅頭では、白兎の形をした和菓子や鶯色の饅頭などを買い求めた。昼食後は留学生たちの中で、饅頭の形などの話題で盛り上がった。

午後からは、「平野映像資料館」を訪れた。館長さんのご厚意で、80年前の日本やアメリカの風景、そして50年前の中国の映像を見せていただいた。特に中国やアメリカから来た留学生は、

往時の国の様子を、遠くはなれた平野の地で見ることができ、大変驚いていた。杭全神社の散策では、本殿・拝殿・狛犬の意味について質問があり、一つ一つの問いが私たち日本人にとっても考えさせられるものであった。また留学生から、寺や神社が住まいと混在している風景は、平野にかぎったものなのか、又は日本でよく見られるものなのか、と尋ねられた。私達の生活の中にとけこんでいる寺や神社のある風景が、留学生にとっては不思議なものとして受けとめられていることに改めて気づかされた。



会話がはずんだ昼食のひととき(おもろ地)

全興寺へ戻ると、学生たちはレポートの作成にとりかかった。日本語で散策の感想を記すのは決して容易ではないが、ボランティアの人びとも一緒になって、お互いに意見を交わしながら文章作りが進められた。

私たちB班の散策では、留学生がそれぞれに平野の文化と出会い、そして何かを発見したようであった。それらの発見が、学生自身にとって文化遺産を模索する過程なのだと感じた。



古いネガを熱心に見る留学生(平野映像資料館)

人びとのささやかな日常を見た平野

R.A. 和住 香織

C班

〔留学生〕

盧 奕安 (22歳・台湾)

トリンカ・クロフォード (24歳・アメリカ)

マリン・レイモンド (21歳・フランス)

ラドワ・アマーリ (19歳・エジプト)

ローランド・ユウタ・ヘンドリクソン

(19歳・アメリカ)

〔学生ボランティア〕

森田 真広 (文学研究科博士課程前期課程2年)

原田 恒恵 (法学部4回生)

ズオン・ゴック・フォン (商学部2回生)

C班は午前中は杭全神社、午後からは大念仏寺を訪れた。この日はあいにくの雨模様で、傘を差しながら町を歩くことになった。身軽に気軽に平野の町を感じてもらいたかったが、留学生の目には雨の大阪・平野がどのように映っていただろう。

午前中には杭全神社を訪れた。道行く途中、和菓子屋があった。立ち止まって、いろいろな形の和菓子が並んでいるショーケースを覗いた。「和菓子は季節の移り変わりを表現しているのだ」と説明すると、興味深く聞いているようだった。中には買い求めて、早速頬張る学生もいた。買い食いを楽しむのも町並み散策にはつきものである。



留学生に人気だった和菓子

和菓子屋を通り過ぎ、車の往來の激しい国道25号線に出た。杭全神社の大きな鳥居があり、その東側には金光教平野教会が建っている。一見

すると同じ敷地内にあるように見えるので、「これも神社なのか？」という質問を留学生から受けた。大きい鳥居をくぐり、お茶池や日露戦没記念碑のある参道を進んだ。「百福廻来」とある標柱をくぐると、すぐ左手には大きな楠の木がある。幹回りが8メートルもある大樹で、そこで留学生たちは盛んに写真を撮っていた。大門をくぐり、境内では自由に歩いてもらった。拜殿の前にいる狛犬の足になぜたくさんの紐が巻きつけられているのか、など、普段私たちが見ているのに気に留めていないことに留学生たちは注目していた。

しばらく神社で過ごしたあと、昼食を取るためにいったん全興寺に戻った。その道筋は、午前と同じで、和菓子屋を通るルートである。これは和菓子を買いたい留学生からのリクエストだった。

午後からは大念仏寺を訪れた。寺へは商店街を抜けて行った。商店街は日曜日で休業している店舗が多かったが、女子留学生がカバン屋や和装雑貨店で立ち止まり、ちょっとしたウィンドーショッピングを楽しんでいた。

寺ではお堂の中に入り、雨音が聞こえる中、静かに佇んだ。信仰している宗教の違いなのか堂内には入らない人もいたが、「建物や木がとにかく大きく、整然としている」と感嘆していた。

北野武の映画の世界を見て日本に来た人、商業や経済を勉強するために来た人、と留学生の専攻はさまざまである。留学生にはごく普通の大阪の町の様子を見てもらうように努めた。平野の人たちの町に対する取り組みは、「ごく普通」とは言えないものかもしれないが、毎日の生活の中にある、人々のささやかな営みを感じてもらえていたら幸いである。



雨の中でも元気だったC班メンバー

留学生の好奇心

R.A. 松永 友和

D班

〔留学生〕

張 怡 (21 歳・中国)

柳 知賢 (21 歳・韓国)

ジュリアン・シメオン (29 歳・フランス)

マリア・ゲーデ (26 歳・デンマーク)

カーラ・モーガン (20 歳・オーストラリア)

〔学生ボランティア〕

岩阪 愛 (法学部 1 回生)

池上 倫子 (文学部 4 回生)

当日、本部が置かれた全興寺^{せんこうじ}を出て、まず向かったのは杭全神社^{くまた}。杭全神社は「鎮守の森博物館」と呼ばれるだけあって、境内の巨木に何人かの留学生が驚いている様子だった。神社ではまずお浄めと参拝の仕方を伝えた。信教の自由もあり、実際に行なうかは各自にまかせた。そのあと自由に散策してもらった。当日はあいにくの雨にも関わらず、灯笼や本殿を食い入るように観察する留学生もいた。そのあと、全興寺に戻り昼食をとった。



杭全神社でお浄めをする留学生

午後からは、まず大念仏寺^{だいねんぶつじ}に向かった。大念仏寺でもしばらく自由時間をもうけたが、その間、目を閉じて静かに祈る一人の留学生の姿が印象的だった。また、ある留学生は、「仏様の持っているものは何か」、「この神様はどんな人か」など、

さまざまな質問をし、私自身返答に窮してしまうこともあった。あらためて留学生の好奇心の高さとこちらの知識不足を認識した。



レポートを作成する留学生

大念仏寺をあとにして、続いて「かたなの博物館」、「平野映像資料館」を訪れた。「かたなの博物館」では、展示されている刀をじっと見学し、そのあと実際に日本刀を手を持たせていただいた。ほとんどの留学生は、はじめて刀を持つことができ、喜んでいる様子だった。「意外と刀は重いですね」と感想をもらす留学生が多かったが、ある留学生は、こちらが「刀を持たせてもらえるよ」と伝えても、「私は少し怖いから遠慮します」と答える留学生もいた。

「平野映像資料館」では、文化大革命以前の中国の映像を見せていただいた。はじめて見る古い映像に留学生は興味津々の様子だったが、なかでも中国からの留学生は、最後まで興味深く映像を見ていた。その後、全興寺に戻り、D班の「大阪探検」は終了した。

日本に来て一ヶ月の留学生にとって、平野はどのように映ったのであろうか。日本に留学するだけあって、日本のあらゆるものに興味を抱いている様子だった。平野を歩いている途中にも、留学生から「あの家にはなぜ布^{のれん}（暖簾）が掛かっているのか」、「この店は何を売っているのか」など、さまざまな質問を受けた。留学生と一緒に歩いてみて、あらためてこちら側の語学能力の必要性を実感するとともに、自分自身、国内でも実はまだまだ知らないことが多いということを、留学生から教えられた。

おもい 意思を伝える—留学生と歩いた平野—

R.A. 中尾 和昇

E班

〔留学生〕

しゅう きょう に
周 嬌妮 (20歳・中国)

よう えん こウ
楊 遠翔 (21歳・台湾)

ジェシカ・ホートン (20歳・アメリカ)

アントニー・リエベン (23歳・フランス)

ヘレナ・ラム (19歳・アメリカ)

〔学生ボランティア〕

もとくに
元國 有梨 (文学部1回生)

山口 琴世 (文学部3回生)

E班は、留学生の希望もあり、まずは杭全神社を訪れた。最初に杭全神社の由緒について簡単なレクチャーをしたあと、留学生には杭全神社内を自由に散策してもらった。狛犬や奉納された絵馬を熱心に見入っていたのが印象的だった。続いて、大念仏寺を訪れた。平日ということもあり、人は少なかったが、その分自由に見て回ることができた。留学生たちは、興味のある建物などをカメラに収めていた。その後、全興寺に戻って昼食をとった。阪神タイガースのデザインが入った大阪弁当に少し戸惑い気味だったが、とても満足した様子だった。



杭全神社の奉納絵馬に興味津々

午後からは、まず全興寺内の「駄菓子屋さん博物館」を訪れた。留学生たちは、とりわけ博物館の外に設置されているパチンコに夢中になってい

た。全興寺を出て、近くの「和菓子屋さん博物館」に向かった。ご店主に和菓子の作り方や木型について教えていただき、留学生たちはたどたどしい日本語ながら熱心に質問していた。甘いものが好きなのは万国共通のようで、それぞれお土産に和菓子を購入していたのが印象深かった。その後、平野公園内にある赤留比売命神社に向かった。留学生の一人が、「本殿の中には入れないのですか?」と聞いたので、「あそこは神様がいる場所なので入れないんですよ」と教えたら、なんとか理解してくれたようだった。雨の降りしきる中、再び全興寺方面に戻り、「もう一つの和菓子のお店に行きたい」とのリクエストがあったので、亀乃饅頭に行くこととなった。ここでも留学生たちはどの和菓子を買おうかと悩んでいる様子だった。最後に、「かたなの博物館」を訪れた。館長さんのご好意で、実際に刀を持たせてもらった。思った以上に重量感があるので、留学生たちは驚いていた。



かたなの博物館にて

私が担当したE班の留学生たちは、神社や寺院に大変興味を持っていた様子だった。特に杭全神社には特別関心が強く、彼らが撮影した写真の多くに、狛犬や絵馬などがおさめられていたことに強い印象を受けた。ただ、留学生に神や仏の意味を理解してもらおうと説明したものの、なかなか上手くいかなかったことが少し心残りだった。〈意味〉を伝えることと〈おもい〉を伝えることの違いを感じた一日だった。

さまざまな感性と 町の温かさに触れた一日

R.A. 影山 陽子

F班

〔留学生〕

李 旖旎 (28歳・中国)

ジョセフ・レーサム (20歳・イギリス)

ミヒャエル・ヴィッターアウフ (24歳・ドイツ)

スコット・コズマ (20歳・アメリカ)

〔学生ボランティア〕

亀田 剛広 (文学研究科博士課程前期課程2年)

F班は、留学生4名、スタッフ1名とR.A. 1名という、他の班に比べれば少ない人数での行動となった。人数の都合で外国語ができるボランティアはいなかったが、留学生は全員日本語での会話が可能であり、会話を苦手とする留学生には日本語が堪能な留学生が通訳してくれたため、意思の疎通はスムーズだった。

我々はまず、環濠跡を見たいという留学生の希望により、平野郷の東の端にある平野公園の環濠跡へ向かった。商店街の祭用品を売っているお店の前を通ったとき留学生にだんじりとは何かと聞かれたが、形状等をうまく説明できなかつたので、平野公園に向かう途中にある「ちっこいだんじり館」に寄った。だんじり館は閉館していたが、店先のショーウィンドウに展示してある、だんじりのミニチュアや祭の写真などは見られるように



店先の狸と蛙に夢中

なっており、祭とだんじりについて留学生にきちんと伝えることができた。

平野公園の環濠跡は土手の跡だけで水は流れておらず、留学生たちは少々残念そうだった。隣の赤留比売命神社では猫が住み着いており、神社の本殿とともに猫にも夢中であった。

公園を後にして商店街へ戻り、南港通り沿いの「珈琲屋さん博物館」へ向かった。途中、小料理店の店先にある、なんでもない狸や蛙の置物や、おかき屋さんが販売するお餅、平野郷の境にある地藏堂など、さまざまなものに興味を持っていた。

「珈琲屋さん博物館」を開いている喫茶店「珈琲苑・茶坊主」は通常通り営業中であったが、ちょうどお客さんが少ない時間帯であったため、大勢での見学も快く迎えてくださった。留学生たちは展示されているさまざまな珈琲道具や、古めかしい電話機を模した公衆電話（実際に使用できる）に興味を持っていた。



F班メンバーとお別れ

いったん全興寺に戻っての昼食の後は、杭全神社に向かった。手水の仕方を教えた後は、各自で境内を好きに回ってもらった。拝殿や本殿、寄進者の氏名を刻んだ石柱など、興味の先はさまざまようだった。神社敷地内にある、今も水が流れている環濠跡も案内した。

その後、商店街を歩いて全興寺に戻った。留学生たちは少し寂れた、昔ながらの店舗の並ぶ商店街を面白そうに見学して回った。呉服店で着物の写真を撮る子もいれば、日本人から見ればごく普通の薬局店内を撮る子もいた。日本人とは異なる感性を楽しめた一日であった。

留学生レポート

「大阪を探検しよう！」当日、留学生全員に、撮影した写真の中からコンテスト応募作品を選んでレポートを書いてもらいました。

1. アナスタシア・グバル (25歳・ロシア)



「やはり国の過去と歴史は個人の大事な部分です」

◆写真を選んだ理由

国の過去と歴史は国民と個人にとって自己の固定の大切な部分です。私達は「私だけの行動の責任をとる」とか「自分だけの生活を送る」と言っても、実は私達は生まれた国の過去と現在の部分です。外国に住んでいても、このことが好むと好まざるとにかかわらず。ですからこの日本とロシアの戦争の記念碑を見た時はやはり今日の一番強い印象でした。私にとって日本の、世界の平和を支えている国のイメージは本当に大切です。ですから自分の伝統のことでなく、新時代の大事なことを守ってほしいです。

◆印象に残ったもの・場所

神社の近く

2. セシル・ブルー (22歳・フランス)



「FOLDING SCREEN」

◆写真を選んだ理由

This picture makes me feel very peaceful. It looks like the old painting called “folding screen”. He paints of the white sky look like clouds. But he look is here to remind us we only humans who can't arise themselves. However the trees arms invite us to look up, like a hope.

(この写真を見ると、とても穏やかな気持ちになります。日本の古い絵画、とある「屏風」に似ていると思いました。その屏風の作者は白い空を雲のように描いていました。自分の力だけで成長できないのは私たち人間だけだということを、彼の作品は気づかせてくれます。だけど、木の枝は私たちの眼差しを上へ上へと向けてくれて、そこには希望を感じます。)

◆印象に残ったもの・場所

During the excursion we saw a Japanese family go to the Kumata-Jinjya : first they put water on hands and mouth, then they prayed and then they get into the big temple. There was a little baby and a man in white said prayer for him.

(日本人の家族が杭全神社にお参りしているのを見ました。まず水で手と口を清め、祈りを捧げたあと、社殿のなかに入っていました。その家族には赤ちゃんがいて、白い衣装の男性が赤ちゃんのために御祈りをしていました。)

3. 金東 (24歳・中国)



「Founder」

◆写真を選んだ理由

日本の神社は有名で、日本の神社は歴史がある。私たちは神社の建築家を忘れてはいけない。

◆印象に残ったもの・場所

一番印象に残った場所は商店街です。中華料理があるし、日本の伝統的なものがあります。

4. アレクサンダー・バット (21歳・イギリス)



(写真は口絵・47頁に掲載)

◆写真を選んだ理由

私はこの写真がとてもたいせつだと思います。なぜなら神社をサポートしようとする人たちの名前がうつっているからです。このかく度から彼らの名前と神社のりょうぼうが見えます。

◆印象に残ったもの・場所

全興寺が好きです。なぜならコマやけん玉などのゲームをしたからです。

◆その他

楽しかったです！たくさん写真を取りました。

5. 宋潤珉 (25歳・韓国)



(写真は口絵・48頁に掲載)

◆写真を選んだ理由

銅像の足にいろいろな糸が縛られたのでどうして糸があるか考えました。人々のすべての願いごとをこの銅像が見せています。全部かなってほしいです。

◆印象に残ったもの・場所

杭全神社。なぜならばこの所で一つご家族を見たからです。6人が神社のへやの中でなにか儀式をしてました。おぼうさんが赤ちゃんに何かを振っていました。日本の特別な文化を経験したので良かったです。

6. 韓一瑾 (25歳・中国)



「祈り」

◆写真を選んだ理由

今回の見学の目的は大阪の純粋な古いものを発見することです。全興寺でお祈りする人はこの伝統を守る人だと思います。

◆印象に残ったもの・場所

平野映像資料館。そこで1925年、つまり昭和元年の大阪の町の様子を見ることができて、うれしいです。

7. ファイザ・ブッダール (22歳・フランス)



(写真は口絵・48頁に掲載)

◆写真を選んだ理由

I've chosen this picture because it's very representative of the perfect symmetry of the Japanese architecture. No matter the way you look at this picture, it always makes sense.

(この写真を選んだのは、日本建築に見られる左右対称の完璧さがよく表れているからです。この写真はどの方向から見ても写真として成立すると思います。)

◆印象に残ったもの・場所

I really enjoyed this day, I had a really new look on Osaka. The streets of the old Osaka seem so authentic, so old : it was like a travel in the past. My favorite place was the Hirano movies museum where I saw some footage of the very old Osaka : it was impressing!!

(とても充実した一日でした。大阪の新たな一面を見ることができたように思います。大阪の古い街並みはとてもリアルで古びた感じで、昔を旅しているようでした。一番よかった所は「平野映像資料館」で、かなり昔の大阪の映像を見ました。おもしろかったです!)

◆その他

My second favorite place was the Sward Museum where I saw real Katana for the first time of my life.

(2番目によかった所は「かたなの博物館」です。初めて本物の刀を見ました。)

8. アレクサンダー・ブシェー (21歳・アメリカ)



(写真は口絵・47頁に掲載)

◆写真を選んだ理由

私にとってこれは日本のせいしんだから。

◆印象に残ったもの・場所

とても古い映像をみたことと、おじさんのはなしです。

◆その他

日本一番。

9. クレア・マザーソール (20歳・イギリス)



「新体験」

◆写真を選んだ理由

お寺に入った時が一番面白い体験でしたから、写真を選びました。

◆印象に残ったもの・場所

お寺へ行ったり、和菓子を食ったり、映像を見たりしました。とても楽しかったです。

10. 盧奕安 (22歳・台湾)



「忠魂碑」

◆写真を選んだ理由

この写真を選んだ理由はたぶん中で一番いいのです。

◆印象に残ったもの・場所

やっぱり全興寺です。その寺は人に厳かな感じをくれて、そしてとっても綺麗な場所です。でも、ちょっと残念です。中は撮影禁止です。

◆その他

日本の商店街は台湾のと比べれば、全然違う感じ。なにかというと、もっと清潔です。

11. トリンカ・クロフォード (24歳・アメリカ)



(写真は口絵・48頁に掲載)

◆写真を選んだ理由

アメリカで狛犬はよく知られている。この写真はよく知られているものとあまり知られていないものが両方うつっている。

◆印象に残ったもの・場所

大念仏寺はとてもきれいだった。

12. マリン・レイモンド (21歳・フランス)



「しずかさ」

◆写真を選んだ理由

I choose this picture because we have an objective view on the temples. We can see lots of details and it looks as though this was a secret place hidden in the middle of the jungle.

(お寺の境内の様子をよく見渡せるので、この写真を選びました。とても細かい部分まで分かりますし、雑木林の中に聖なる場所がひっそりと佇んでいるようにも見えます。)

◆印象に残ったもの・場所

杭全神社の平和の感覚

13. ラドワ・アマーリ (19歳・エジプト)





「神社で見つけたもの」

◆写真を選んだ理由

平和と安心を述べる。お祭の表示みたいです。

◆印象に残ったもの・場所

大念仏寺。今まで見たお寺の中で一番でっかいお寺でした。

14. ローランド・ユウタ・ヘンドリクソン
(19歳・アメリカ)



「へいわの日」

◆写真を選んだ理由

この写真は、地藏ですから、しずかでたいせつ
の感じがします。たとえば、あかるい花は、たい
せつに見せてあります。そして酒もいいです。

◆印象に残ったもの・場所

一番のたいせつの感じは、尊敬です。たとえば
地藏です。

15. 張怡 (21歳・中国)



「神社の本殿」

◆写真を選んだ理由

杭全神社の本殿はとても美しいと思います。古
い歴史を持つ感じがします。そして、斜めで写真
を撮ると、二列の釣燈籠がはっきりになって、もっ
ときれいで、清い感じがします。

◆印象に残ったもの・場所

刀の博物館で、はじめに刀を触りました。そし
て、映画博物館で40年前ぐらいの北京の映像を
見ました。素晴らしいと思います。

◆その他

平野はほんとうに古い歴史を持った町です。古
くてきれいな神社とお寺がいっぱいあります。そ
して、博物館とかいろいろな場所を見学しました。
ほんとうに勉強になりました。

16. 柳知賢 (21歳・韓国)





「無題」

◆写真を選んだ理由

あのおばさんを見て、韓国にいる私の母親を思い出しました。やっぱりどこでも、「母親」っていうものは、だれよりも家族の健康や幸せなどを願っていると思います。雨が降っても、お寺に来て祈っている姿を見て、形容できないなにかを感じました。言葉で話せないものを、この1枚の写真で表したかったんです。

◆印象に残ったもの・場所

どこも印象に残りましたが、一番よかったと思うところは、「大念仏寺」でした。静かで、鳥の音、雨の音、いいにおい…。全てのものがおちついて、いままで忙しい生活だったけど、ちょっと、ゆっくり楽しめました。

◆その他

いい写真が撮りたかったんですけど、人も多かったし、一人でうろうろしたかったけど、班ごとに行動してちょっとすきじゃなかったけど、楽しかったです。こんど一人で来てみたいです。

17. ジュリアン・シメオン (29歳・フランス)



「平和」

◆写真を選んだ理由

おもな理由はお寺の木の構造が好きだからです。それにこの写真は自然と人間を合せて平和な感じを与えていると思います。

◆印象に残ったもの・場所

もっともおおきなお寺は一番印象の所と思います。それにいろいろな場所はよい印象を私に与えました。たとえば、古い刀の小さい店もたのしみました。

18. マリア・ゲーデ (26歳・デンマーク)



(写真は口絵・48頁に掲載)

◆写真を選んだ理由

この写真の構図は左半分と右半分が対称的でありながら、左右の建造物はそれぞれ違って、とても調和にあふれています。真ん中の道はずっと先まで続き、人生の“道”を思わせ、それが見る者に興味をあたえるからです。

◆印象に残ったもの・場所

町の雰囲気がとても印象的でした。特に寺は荘厳な雰囲気をもっていました。雨のおかげで、更にもその雰囲気が強まり、空気までも新鮮に感じることができました。

19. カーラ・モーガン (20歳・オーストラリア)



◆写真を選んだ理由

日本的な建物だし、通路もあるし、空間感覚がいいから。

◆印象に残ったもの・場所

かたな博物館の刀、皆とてもきれいです。刀を持って写真も撮りました。楽しいところです。

◆その他

日本にはお寺がいっぱいあります。それに、町の真中に墓が集中しているのはとても不思議なことですね。



「クスノキ」

◆写真を選んだ理由

こんなにでかい木、日本で初めて見てちょっとおどろきました。

◆印象に残ったもの・場所

大念仏寺はすごく広くてきれいな場所で感動しました。

21. 楊遠翹 (21歳・台湾)



「静か」

◆写真を選んだ理由

前と後の木が静かな空間感覚を作って、穏やかな安定感をあたえるような感じです。

◆印象に残ったもの・場所

どこでも神社やお寺を見ることを不思議に思いました。高い建物の中にいきなり古い神社を見つけて、そして写真を撮って、とても楽しいでした。

20. 周嬌妮 (20歳・中国)



「穏やか」

22. ジェシカ・ホートン (20 歳・アメリカ)



「守護者」

◆写真を選んだ理由

I chose this photo because it had the most impact on me. The detail and colors in the photograph are very beautiful.

(一番インパクトがあるのでこの写真を選びました。写真のそれぞれの部分や色合いがとてもきれいです。)

◆印象に残ったもの・場所

The shrine that had the biggest impression on me was the くまたじんじゃ . The detail inside was one of the most beautiful I have ever seen. However, each shirines ability to involve lots of nature was may favorite experience of this trip!!

(一番印象に残ったのは杭全神社です。建物内部の様子は今まで見たなかでも一番と言っているほどの美しさでした。でも、それぞれの寺社で自然を感じられて、今回はとても楽しい経験ができました！)

◆その他

I enjoyed this experience very much and I am very grateful for the opportunity!! Japan is absolutely spectacular!

(今回はとても楽しめました。素晴らしい機会を得ることができてうれしいです。日本は本当に見ごたえがあります！)

23. アントニー・リエベン (23 歳・フランス)



「門」

◆写真を選んだ理由

その写真は私が撮った写真の中で一番きれいな写真だと思います。それに、門の前に人がいないので、全部見えます。最後にこの写真は深さの印象があると思います。そこで、この写真を選びました。

◆印象に残ったもの・場所

一番印象に残った場所は大念仏寺です。とても大きい場所ですから。残念なことにお寺の中では写真を撮ることができませんでした。

◆その他

今日、ありがとうございました。とても楽しかったです。

24. ヘレナ・ラム (19歳・アメリカ)



「Enlightenment」

◆写真を選んだ理由

This photo struck out as the most serene out of all the other. I particularly love the perspective and opening of light as I entered the gate.

(この写真に一番神聖さが表れていると感じました。とくに、門に足を踏み入れた時の、奥行や光の広がりがいとおもいました。)

◆印象に残ったもの・場所

The most memorable places to me was the Kumata-Jinja, because of its wide open spaces before the shrine and site of the shrine. I enjoyed particularly the roofs of each building, the gates of entrance, and the trees surrounding.

(一番心に残った場所は杭全神社です。これまで見た神社の境内では一番広々とした空間でした。とくに建物の屋根や、門、周りを取り囲む木立がよかったです。)

25. 李旖旎 (28歳・中国)



「蛙より狸」

◆写真を選んだ理由

大阪に来てから3週間経ちましたが、何度も何度もお店の前に置かれている狸に巡り会った。平野の古い町を歩いた時、また狸を見た。しかし、今度は蛙と一緒に並んでいた。狸は客寄せのために置かれたが、「蛙は？」と同行の日本人のスタッフに聞いてみたが、日本人でもわからなかった。私にとって、やはり狸の方が可愛い。

◆印象に残ったもの・場所

呉服屋さんのふくろう・杭全神社

◆その他

杭全神社でたくさんの絵馬を見たが、中の一つは以下のように書いてある。「H20.7.29 父の病気が治りますように…手術成功しますように…健康第一・家内安全」。この絵馬に非常に感動した。

26. ジョセフ・レーサム (20歳・イギリス)





「ゴミ箱」

◆写真を選んだ理由

一番きれいな写真ではないけれども、寺のふつうのイメージと違うと思います。それゆえに、もっと面白い感じを作られています。

◆印象に残ったもの・場所

寺は、やはり博物館ではない。いつも生きている場所ですから、必要で宗教らしくないものもあります。私はこのあたりに青のタオルとそうじのものを見て、びっくりしました。でも、うつくしなかった。なにか気に入った。ゴミ箱はやはりかたづけられているもの。自由に、みんなが見える所においてあるゴミ箱は、なにか私にうれしい感じをくれました。

◆その他

写真の一番きれいな建物は、タオルのせいで見えないけど、みんなは建物があるのを知っています。じぶんで建物の外見をじゆうに考えられます。

27. ミハヤエル・ヴィッターアウフ

(24歳・ドイツ)



◆写真を選んだ理由

こちら側に神社があって、橋の向こう側に野球場がある。正に時代の存在し合う証。で、その中心が写真に写っている橋になっている。他には青い自然が綺麗で、橋の赤との対照が印象的。

◆印象に残ったもの・場所

全興寺の地下にある光っている円盤があまりにも不思議で驚いてしまった。



「時代の渡り橋」

28. スコット・コズマ (20歳・アメリカ)



「屋根」

◆写真を選んだ理由

私の写真の中で、これが一番好きです。古い屋根はきれいでした。

◆印象に残ったもの・場所

神社はおもしろかったです。

※留学生のレポートはなるべく原文のままで掲載し、英文には訳文をつけました。また、単純な誤記は訂正し、分かりにくい仮名書きは漢字に修正しています。



全興寺境内での集合写真（「大阪を探検しよう！」2008年10月5日）

地域連携企画第4弾「平野をさぐる」

2008年10月26日（日） 大阪市平野区 杭全神社

大阪市平野区での地域連携企画開催は、2007年5月の「もめん博物館 in 平野」に続き2回目となる。「もめん博物館 in 平野」では、平野区で行なわれている町づくり活動「平野・町ぐるみ博物館」に「もめん博物館」というブースを出展する形で参加させていただいた。「平野の町づくりを考える会」の方がたに助言をいただきながら、いわば「内部からの視点」に立った企画であったといえる。対して地域連携企画第4弾「平野をさぐる」は、「外部からの視点」をコンセプトとした。その一つが来日後まもない留学生による写真コンテストとスピーチであり、もう一つが鼎談「杭全神社と平野のはなし」である。



留学生スピーチの様子

鼎談「杭全神社と平野のはなし」は、地元・平野に所縁の深い三人の先生を講師に迎えてお話をうかがった。一人は杭全神社宮司の藤江正謹氏、もう一人は平野法楽連歌に携わっておられる鶴崎裕雄先生（帝塚山学院大学名誉教授 / 当センター研究員）、そしてもう一人は、平野区にある高校に通学しておられた北川央先生（大阪城天守閣研究副主幹 / 当センター研究員）である。

三人の先生方に、講演ではなく鼎談という形でお願したのは、地元の人間ではない私たちの「平野に関する素朴な疑問」をより多く尋ねたかったことによる。先生方には、事前に打ち合わせをさせていただいた時に、学術的な議論ではなく平野をめぐる「よもやま話」を聞かせてほしいとお

願した。そうした談話の中にこそ、現在に生きる文化遺産を知ることができると考えたためである。



満員の会場

この企画の開催にあたり、当初不安を感じていたのは、はたして地域の人びとに集まってもらえるだろうかという点であった。しかし当日の会場はほぼ満席となり、非常な盛況を呈した。この満席の会場は、杭全神社と地域との密接な繋がりを表すものである。あるいはこの盛況ぶりそのものが、杭全神社と平野をめぐる「生きた文化遺産」であるといえよう。



当日のポスター

(内田 吉哉)

鼎談

杭全神社と平野のはなし

[講師]

藤江 正謹氏 (杭全神社宮司)

鶴崎 裕雄氏

(帝塚山学院大学名誉教授/センター研究員)

北川 央氏

(大阪城天守閣研究副主幹/センター研究員)

[司会]

内田 吉哉 (センター特別任用研究員)

1. 開会

内田：本日の司会を務めさせていただきます、当センター特別任用研究員の内田吉哉と申します。よろしくお願ひします。開会に当たりまして、高橋隆博関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター長より、ごあいさつを申し上げます。

高橋 隆博 (なにわ・大阪文化遺産学研究センター長)：

今日は、あいにくの雨の日でございます。昨日までは大変いい天気だったんですけども、今日は足元がお悪い中お集まりいただきまして大変ありがとうございます。

「関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター」、大変長ったらしい名前ではありますが、これは文部科学省の研究事業でございます、2005年度から始まったものでございます。ちょうど今年で4年目でありまして、いわゆるこの研究事業は時限立法といいますか、5年間が一応の区切りでございまして、来年度(2009年度)でちょうど5年目を迎えるということになります。しかし、5年間だけで果たしていいのかという問題がありますので、その後については少し考えなければいけないなど、こういうぐあいに思っております。

最近、「文化遺産」という言葉を随分あちこちで目にいたしますけど、「文化遺産学」という名前は私どもが考えた名前でございます。その文化

遺産学の中身につきましては、今日の鼎談の中で少しずつお話が展開されていくと思いますけれど、要するに地方自治体とか、あるいはさまざまな伝統技術・伝統文化についてはそれぞれのご論考・ご研究の蓄積がありますけど、まだまだフォローしていない、あるいは気がついていないところもあると思います。そういったところに焦点を当てて研究を進めていこうという研究事業でございます。

さて、今回で地域連携企画は4回目を迎えます。第1回目は、^{ふじいでら}藤井寺にございます^{どうみょうじ}道明寺天満宮で行ないました。大和川左岸の河岸段丘にありました、縄文から古墳時代ぐらまで続いた^{こふ}国府遺跡から発掘されました考古資料は、12点の重要文化財を含んでおりまして、これは関西大学のほうで所蔵しております。ところが、地元の方がこの国府遺跡の中身について、ほとんどご存知ありませんでした。「それじゃあ、^{でがいちゆう}出開帳を」ということで、この発掘されたものを現地に持って行って、そこで住民の方がたに知っていただく、こういう試みでございました。

第2回目は、JR大和路線の沿線にあります八尾というところで行ないました。八尾は江戸時代に^{やすなかしんでん}安中新田という新田会所があったわけですが、新田会所でありました^{うえだ}植田家、この植田さんが土地から^{じゅうもつ}什物を含めてすべて八尾市にご寄贈になったわけです。それにつきまして八尾市のほうから私どものほうに調査を依頼されまして、その調査の成果の一端を^{りゅうげ}龍華コミュニティセンターというところで、植田家の歴史がどういものなのか、あるいは植田家に伝わっている、いわゆる文化遺産とは何なのかということを知っていただきたいということで行なったわけでございます。

第3回目は昨年、平野の町の中にごございます^{せんこうじ}全興寺さんの境内をお借りいたしまして、私どもがあそこに博物館を特別に参加させていただきまして。名前は「もめん博物館」ということでございます。この平野は綿作の中心地でございます、ちょうど全興寺の前の大きなアーケードのある商店街が、すなわち綿問屋がたくさんあったところでございます。そこで、綿づくりや糸くり、糸紡

ぎを地域の子供たちに体験していただきました。

今年は、幸い藤江宮司さんのご理解をいただきまして、この会場でもって平野の歴史あるいは文化遺産、こういったことについて語り合う機会をつくりたいと思っております。なぜか考えますと、第1弾から第4弾まですべて南大阪でして、北大阪がないんですね。片手落ちだというぐあいにおっしゃられるかもしれませんが、逆に言えばそれだけこの地域は魅力にあふれているというぐあいに理解しております。



高橋センター長

少し長くなりますけれど、昨日まで高松におりました。ある大学の集まりがありまして、香川県のほうでは町を散歩する企画を行なっているんですね。それでちょっと奇異に感じましたのは、香川県には町を歩くと古い銭湯屋さんといった、さまざまな文化遺産が残っています。ところが、これをなんとか指定文化財に持っていきこうという動きがあるようなんですね。「ちょっと待てよ」と。指定文化財というのは国宝とか重要文化財が指定文化財なんです。ところが、そこばかりに目を向けますと、実は大事な足元にある文化遺産を我われは見落としがちになるわけです。近代日本はガリバーのような歩幅で歩いてきました。そのために、ほかにあるものをことごとく捨て去ってきたわけです。「そういったものに光を当てなければいけない」というのが私どもの一つの考え方でございます。

また、10月5日に、関西大学においでいただいている留学生を平野に案内しまして、何が自分の目にとまったのか、心を打ったのかということまで写真を撮っていただきました。その写真が後ろ

に並んでおります。いわゆる「文化」とよく言いますが、やはり他国の文化を理解することが文化の第一歩なんです。ですから、理解しあえない文化なんてのはあり得ないわけです。学際とか国際なんていうのはそうなんです。他の学問であったり国を理解することこそが「学際的」「国際的」の第一歩なわけでございます。そういう意味合いで、留学生をここにご案内したわけです。おつけ 10名ほど、少し肌の色の違う留学生がドドッと押し寄せるだろうと思っておりますので、どうぞこちらのほうも少し可愛がっていただきたいと思っております。

最後に、今さらながら、今日ご鼎談いただくお三人については、説明するまでもないと思っておりますけど、少しご紹介させていただきます。

藤江宮司さんは、連歌会を再興といひますか復活させた張本人といひますか、ご尽力いただいた方でございます。もちろん宮司さんは宗匠そうしやうの一人でございます。島津忠夫先生しまづただお（大阪大学名誉教授）もそうでございますし、光田和伸先生みつたかずのぶ（国際日本文化研究センター准教授）もそうでございます。そしてもう一人、帝塚山学院大学名誉教授の鶴崎裕雄先生も4人の宗匠のうちのお一人でございます。何よりも、平野あるいは平野の連歌についてお詳しい方でございます。そしてもう一人、平野区誌の編集委員でございまして、平野のすぐ近くの松原市がご出身でございます、大阪城天守閣研究副主幹の北川央先生をお迎えしております。平野を語るにはこれ以上のメンバーはないというお三人でございますので、存分にお楽しみいただきたいと思っております。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

2. 前半の部

内田：それでは、「杭全神社と平野のはなし」前半の部を開会したいと思います。

先ほど、センター長のほうからもご紹介がございましたけれども、お話いただく先生方を簡単にご紹介させていただきます。まず、一番左側の先生がこの杭全神社の宮司の藤江正謹先生です。今回の企画で、会場をご提供していただいただけでもありがたいのですが、そのうえ「是非とも鼎談にご登場願いたい」という大分図々しいお願いをいたしました。最初はちょっと恥ずかしがっておられたんですけど、私が何とか頑張って口説き落としました。

真ん中におられますのが帝塚山学院大学名誉教授で、私たちの研究センターの연구원もしていただいております鶴崎裕雄先生です。私たちは、最初あまり杭全神社にご縁がなかったものですから、鶴崎先生を先頭に立てて宮司さんのところへごあいさつに伺ったのでございます。

一番右側におられますのが大阪城天守閣の研究副主幹で、私たちの研究センターの연구원もしていただいております北川央先生です。お話の中でおいおい出てくるかと思いますが、実は北川先生も平野に大変ゆかりの深いかただとお聞きしまして、先生の若かりしころのお話などが伺えるのではないかと考えております。先生方、今日はよろしくお願ひいたします。



講師の先生方

さて、「杭全神社と平野のはなし」というタイトルがついているんですけど、最初はものすごくカチカチのタイトルがついていました。よく覚えていないんですけど、「平野の歴史と文化

を語る」とかそういうものすごいタイトルがついていたんです。それで、先ほどご挨拶申し上げましたセンター長に「そんなことでは」というお叱りを受けました。それに、平野の町づくりの会議にもお世話になっていまして、ご相談させていただいたんですけど、そこでも「自由闊達な平野かたぎから言うたら、ちょっとそのタイトルは硬いねん。もっと柔らかくて和やかな鼎談というのはできないのかな」と言われまして、何とか硬い頭を無理やり柔らかくして、今のタイトルに落ちたんです。とはいいまして、やっぱりこれから先生方にお話を伺おうとすると、杭全神社や連歌という硬いところから話がスタートせざるを得ないんです。

さて、杭全神社には連歌所がございますそうで、その年号などを調べると、今年がちょうど杭全神社の連歌所が建てて300周年に当たるそうです。まずはそのあたりのお話を聞いてみたいと思います。鶴崎先生、あれはどこから数えて300年なんですか。

鶴崎：今急に振られたので、どういうふうにご答えたらいいかな。今の杭全神社の境内に入ってまいりまして、社殿の向かって右側のほうにあるのが連歌所であります。この連歌所が出来たのは、新しい大和川ができた後の宝永五年（1708）ですから、それからちょうど300年ということでございます。

連歌所というのは、全国の神社にいくつもあったんです。住吉大社にも連歌所がありまして、昔の絵を見ておきますと、東のほうの鳥居のちょっと横のところに連歌所があって、それが絵図の中に描かれているんです。それが、今はもう移築されまして、社務所の中の一部に入っているんです。こちらのほうの、杭全神社の連歌所を拝見していますから、ぱっと見ると連歌所だとわかるんです。ところが今は、神官さんが着物を着がえたり、それからお配りするものや荷物を置いたり、そういうふうな使い方をされているところなんです。そういう意味で、連歌所があって、今連歌所を実際に連歌の会場として使っているというのは、もうこの杭全神社だけということですから、

連歌所として生きているというのは全国でこだけということでございます。

後でまた、九州の神社のお話が出るかもわかりませんが、そういうふうな意味で、連歌が生かされているのが杭全神社の連歌所です。またお帰りのときにでもご覧になればと思います。その辺で宮司さんに何か連歌所についての話を聞いてみましょう。



鶴崎裕雄氏

藤江：さっき、その宝永五年の話が出たんですが、私もずっと昔から聞かされているし、『連歌所記』という書き物にも宝永五年と書いているんですね。先般、修理しましたけれども、そのときに宝永五年の棟札を探したんですね。何枚か出てきた中に一番古いものは享保二年（1717）だったんです。それで、「じゃあ何から宝永五年になったのか」というのが今のところわからないんです。神主としていつだと聞かれたら宝永五年でいいんですけれども、歴史学者として聞かれたときに、「じゃあ宝永五年の根拠は」と言われたらちょっと困る状況かなと思うんですね。でも一応、神社では宝永五年でいこうかと思っておりますけれども。そういう出来事がありましたですね。

内田：今の神社ということでお聞きますと、やっぱり連歌のために使っておられるんですか。

藤江：連歌を再興するまでは連歌所という名前ももう消えておましてですね、私らが子供のときには奥座敷とか言われていたんです。それで、もう連歌そのものの言葉を耳にすることもなかった状態ですから、私らは子供の遊び場であったし強

部屋であったし、それからいとこたちがたくさん来たときには、たくさん何人も並んで寝られる楽しい部屋だったんですね。何が違うかというと、長押の上に三十六歌仙の扁額があることなんです。私のほうは三十六歌仙と思ってないですから、百人一首のかるたの大きいのが並んでいるんだと思っていたんですけれども。そんなところで遊んでいましたから、子供のときにはボールをぶつけたこともありますし、チャンバラをしていて三十六歌仙に竹の棒で穴をあけたこともあるんです。そんな状態なので、多分この建物はなくなっていくんだろうなと思ってはいたんです。

ところが、建築を研究されている大阪府立布施工業高校の東野良平先生と京都府立大学の林野全孝先生、その二方が見えて、「これは連歌所といって大変貴重な建物だ」ということを聞かされて、「へえっ」ということだったんです。いかほど貴重かというのは、その後おいおいわかってくるんですけども、残すべき建物であるというふうに認識を変えたのはもうわずか25年ぐらい前の話です。

内田：今日北川先生にお越しいただいている一つの理由に、北川先生が平野の高校に通っておられたということがあるんですけども、平野に通っておられた高校生から見ても杭全神社というのは有名だったんですか。

北川：高校生の間で有名だったかどうかは正直わかりません。私は流町にある大阪教育大学の附属高等学校平野校舎の出身なんで、高校時代は今日のタイトルのとおりで平野を自転車で探り回っていました。

私は松原市の大堀というところに生まれ育って、今もそこに住んでいます。平野区とは大和川を隔てて南側に位置しまして、昔の街道名でいうと古市街道というのが平野から出て、川辺というところで大和川を渡って着くところが大堀です。そこから藤井寺の方へ行くのがこの古市街道で、私が子供のころには今のJRの平野駅、当時は国鉄平野駅でしたが、そこから長原・川辺を通過して近鉄南大阪線の河内天美駅まで近鉄バスが通って

いたんです。子どものころからこのバスでずっと平野へ買い物に来ていたんです。買い物といったら平野の商店街か針中野の商店街でした。バスに乗っていると、平野駅に着く少し前に大きな鳥居があって、横に大きい建物があるんで、僕はあれが杭全神社だとずっと思っていました。実は鳥居は杭全神社のもので、隣の大きな建物は金光教さんだったんですね。それに気づいたのが高校生のときでした。このバスの経路でずっと平野に来ていましたし、もちろん杭全神社の名前はすごく有名でしたけれども、そういう連歌所とか歴史的な話はあまりよく知りませんでした。

内田:僕たち関西大学の人間は、どうしても頭でっかちなところがありまして、「杭全といえば連歌や」というところから入りますから、例えば高校や中学に通っておられたら、地元の有名なスポットになってるのかななんて思いました。

北川:そういう意味ではすごく有名です。杭全神社も有名でしたし、大念仏寺さんとか、あとさつきから名前が出ている全興寺さんとか、そういったあたりは平野ではもちろん有名なところですけどもね。当時は歴史的に重要かどうか、建物の貴重さとか、そんなことはよくわからずにいた、ということです。

内田:先ほどちょっと藤江先生から三十六歌仙にボールをぶつけたお話が出てきましたが、以前僕が見せていただいたときに随分きれいな三十六歌仙の扁額が掛かっていて、デジタル複製したものにかわっているというようなお話がありました。

藤江:三十六歌仙の扁額には常用と非常用というか、ハレの日用のものと二種類準備されていてね、普段は襖仕立ての紙に描いた三十六歌仙が掛かっていて、それはもう日に焼けてぼろぼろなんです。それで、蔵の中を見ると、何かハレの日のために桐の板に金箔を張って、その上に直に描いた桐板仕立ての三十六歌仙が入っていたんです。その桐板のほう古いもので、襖の常用のほう

は享保五年（1720）のものなんですね。少し古いほうは延宝七年（1679）のもので、まだきれいに全く日に当たらずに保存されていました。それで、「どうせ複製をつくるんだったらきれいなほうでやろう」ということで、桐板のほうを全部写真に撮ってデジタル処理をして、今のものをつくったんです。あれは、実は今ならもう少しいい材質のものがあると思うんですけども、当時はまだフォトショップ（画像編集用ソフト）か何かで初めて出たところで、フィルムそのものに耐候性の証明がなかったんです。それで何年ぐらいこの色調がもつんだろうと思っていました。お金がなかったもんですから、モニターでしてあげますということで、住友スリーエムから協賛をいただいで安く仕上げたものなんです。ですので、大分色が変わってきましたね。



藤江正謹氏

内田:古くて貴重なほうを杭全神社さんで管理されているのでしょうか。

藤江:古くて貴重なほうというか、私が素人目に見ても、常用に使っているもののほうが絵が上手なんですよ。これは狩野派の方が描いた絵で、見るからにプロの描いた上等な絵なんです。それで、その桐板のほうは、地元のちょっと器用な方が描かれたという感じの絵で、芸術的には価値が逆転するのかなと思うんですけども。とにかくそのきれいな絵は蔵の中にきっちとしまっていてあるんです。

内田：僕が見たときはデジタルのほうなんです、鶴崎先生と北川先生は、貴重なほうをご覧になったことはあるんでしょうか。

藤江：デジタルができるまでは、しばらく飾っていたときはありますし、連歌所として再興したときの最初の連歌会にも、それを出していましたね。

内田：連歌所の復興は、発起人も含めてどういういきさつで進められていたんでしょうか。

藤江：それは、先ほどの話から何回も出てくるように、全興寺の川口良仁かわぐちよしひとさんが私と同級生でして、川口さんが含翠堂講座がんすいどうというのを5月5日と10月10日の年二回やっておられまして、一つやると「じゃあ次は何をしようか」という話になるわけですね。それで、たまたま社務所の前でその話をしていて、「この連歌所は何か貴重らしいで」「せっかくもう日本でここしか残ってないっていうんだったら、これを使って何かやろうか」と。そのころは連歌なんかものになるとは夢にも思っていなかったもんですから、「連歌って何や」というぐらいのレベルなんですよね。それで、「とにかく連歌の研究者を探して相談に行こう」という話から始まっているんですよ。

内田：今でも月一回されているんですか。また、そのときには鶴崎先生もお越しになるんですか。

藤江：原則月一回ですね。

鶴崎：ちょうどおとといに、ここでさせてもらったところです。

内田：日は決まっているんでしょうか。

鶴崎：いや、大体やったときに、「次はいつしようか」と言って、「じゃあこの日が空いてますから、この日にしましょうか」と言って決めています。

内田：僕も、「ちょっと勉強しないと」と思って連歌の本を読みましたが、どうも決まりとか

がちんぶんかんぶんで、参加される方は随分勉強されて来ておられるんですか。

鶴崎：勉強というよりも、やっているうちに慣れてくるといような感じはしますね。

藤江：必要なのは、知識の豊富さじゃなくて図太さですよ。

内田：僕はちょっと無理ですね。

鶴崎：いやいや、慣れてきたらできますよ。

藤江：確かに、今からはちょっと入りにくいかもしれないですね。というのは、20年前に始めたときはみんなが初心者だったんですよ。それで、「連歌ってどんなもんなんやろう」というところからはじめまして、知らないことが決して恥ではなかったというか、連歌をブロックのレンガと間違えても誰も笑わなかった時代だったんですよ。だからあまり臆することなく座に入れましたし、「何も考えないで詠んだようなものでも本当に採ってもらえるのだろうか」と思いながら出した句を、先生方が一生懸命に「こうしたらいい」「ああしたらいい」と言って調整を加えた上で、「じゃあ、あなたの句にしておきましょう」というような形でスタートしましたから、本当にみんなで支え合っていた感じですね。

それから、だんだん形が決まっていったので、レベルは別にしても、今は前提として「こうでなきゃいけない」というものがまずあるわけですね。だから、確かに敷居は1センチか2センチは高くなったかもしれないですね。

鶴崎：今、平野の図書館で月一回、第一金曜日に図書館連歌というものをなさっているんですけども、それはすごく入りやすいそうですね。

藤江：ええ。図書館連歌は、その1センチ、2センチの敷居をなるべく下げようというところでスタートしているんですよ。

内田：では、インターネット連歌の役割というのは。

藤江：インターネット連歌は誰でも入れる仕組みなんで、もうぐちゃぐちゃになるんじゃないかというのを一番恐れていたんですね。でも、始めてから10年ぐらいになるんですけども、たまにおじま虫が入ってきて削除することがあるぐらいで、基本的にはかなりの高レベルで水準が保てているんです。何でなのかはちょっとわからないですけどね。

内田：杭全神社さんは、立派なホームページがあったり、インターネットで連歌をされているので、すごくITに強い神社のようなイメージがあるんですけども、そういう発想をしたり、それを実行したりする先進的な部分というのはどのあたりから。

藤江：いや、今はもうコンピュータのほうがすごく進歩しましたんで、お世辞にも詳しいとは言えない状況なんです。だけど、コンピュータというものが世にあらわれたときから関心はあって、20年前に鎌倉からこっち（平野）に帰ってきたときに、「この神社でコンピュータというのをどう活用できるか」ということをいつも考えていたんですね。それで、氏子崇敬会の名簿管理と、それからもう一つ文化的なもので何かと考えて、インターネット連歌というのをやってみました。

内田：ほかにもお話を聞きたいものですから、ちょっとお話がかわりますけれど、つい杭全神社というやっぱり連歌が有名で、連歌所がすごく貴重なんだというところが第一印象なんですけれども、本殿も重要文化財になっておられるんですよね。そこには熊野権現くまのごんげんが祀られているので、やっぱり世界遺産に指定されている熊野と平野で街道が行き来するのは何か関係があるんでしょうか。

藤江：そうですね。熊野の街道沿いにできた八王子社はちおうじとか熊野王子くまのおうじというお社と、ここが成り立ち

において必ずしも重ならないと思うんです。けど、平野の町の人というのは、非常に自立の気に富んでいるというか、あまりここから出かけないでこの中ですべて用を足そうという、自治都市としての誇りというようなものがあつたと思うんですね。それで、それぞれにみんな時代的にずれがあるんですけども、世の中で稲荷信仰いなりや住吉信仰すみよし、八幡信仰はちまんといった新しい信仰がはやれば、「その神さんをお祭りして自分たちの町の中につくってしまおうじゃないか」というような気風があつたんじゃないでしょうかね。だから、祭神は大体一柱か多くて三柱か四柱のお宮が多い中で、ここは数え上げれば両手では足りないぐらいで、口の悪い人は「神さんのデパート」と言うんですけどね。まあ、あらゆる歴史上に登場する神様はお祭りされているという珍しい神社ですね。そういう関係で、熊野信仰が鎌倉時代から江戸時代までかなり長く盛んでしたので、その間に信仰が盛んになるにつれて第二殿、第三殿という形でお社がいっぱいになったんだと思うんです。

内田：連歌所も本殿もすごいものなのですが、この間僕たちの研究センターで、杭全神社の蔵に入れてもらいまして、中にどんなものがあるのか調べさせてもらったんですけども、そしたらものすごくいろいろなものが出てくるんですよ。ちょうどその時に、蔵の中で錦の袋に入った刀を見つけたんですけども、ああいう刀というのはどういふものなんでしょうか。

藤江：古い刀はすべて太平洋戦争のときに供出して戻ってきていないんです。だから、今ある物はすべて戦後に、「こんな家の蔵から出てきたけれども置いておくのは気持ち悪いから神社で預かってください」というような形で奉納されたものなんです。それもそんなにたくさんはないですよ。

内田：つい、神社に刀があるというと、例えば名のある武士が名刀を奉納したのかなと思って、にやにやしています。

藤江:そんなのも、昔はあったかもしれませんね。

内田:どうなのでしょう、北川先生。特に近世において、杭全神社と武士とのゆかりはないんでしょうか。よく大坂夏の陣のときには、このあたりも合戦場になったということでお墓もありますけれども、杭全神社や平野あたりで、例えば大坂夏の陣の合戦になったあたりの逸話があったりするんでしょうか。

北川:そうですね。さっきの話にさかのぼりますと、僕はここに熊野権現が祀られていることにすごく興味を持っているんです。熊野の信仰というのは、皆さんもよくご承知のように、平安時代くらいから中世にかけてたいへんはやり、全国を席卷して各地に熊野社が成立しました。ここ平野でももちろんそうした流行にのっとって熊野権現が祭られたとは思いますが、杭全神社だけではなく平野というところ全体を見渡したときに、いつも「都市」としての側面ばかりが強調されるように思います。「自治都市」とか「環濠都市」とかいった具合にですね。けれども僕自身は「聖地」というキーワードでもこの平野を読み解けるのではないかなと思っています。

熊野の信仰というのは、有名な説教節「小栗判官おぐりはん」で語られるように、よみがえりの信仰を集めた聖地なわけですね。宿病で苦しんでいる小栗判官が、熊野へ行って湯の峰の温泉につかることによってもとの体に回復するという、よみがえりの聖地として知られるわけですが、ここ平野の地でもやはりよみがえりが語られます。この杭全神社とは非常にかかわりの深い長宝寺ちやうぼうじさんの「よみがえりの草紙」に記される話は中世の信仰を考える上で非常に重要な中身を持っています。慶心けいしんという尼さんが突然亡くなり、閻魔大王のもとに引き出されるという話なんですけれども、そのときに慶心が熊野詣の際に使った杖を持って閻魔大王のもとに行くというストーリーになっているわけですね。なぜ熊野詣で使った杖を持って閻魔大王のところに行くのかということですが、やはりこの「よみがえりの草紙」に語られる話にも熊野信仰の要素を認めるべきじゃないかなと思っ

ています。もちろん都市的な機能が十分に備わっていて、そういう面も平野を考える上でたいへん重要だとは思いますが、他に「聖地」としての側面も持っていた、少なくともそう認識されていた時代があったんだろうと思っています。あの「よみがえりの草紙」に語られる閻魔さんからお手判てはんをもらったという話は、信濃の善光寺ぜんこうじで語られる話とほとんど同じ内容です。信濃の善光寺というのも善光寺縁起で語られるようによみがえりの聖地で、善光寺や熊野また四天王寺など中世の霊場では盛んによみがえりの信仰が喧伝されました。そうした、中世の庶民にすごく普及したよみがえりの信仰が、この平野でもたいへん熱心に信仰された、そんな時代があったんじゃないかなと思っています。大念仏寺だいてんぶつという融通念仏宗の本山がこの地に営まれてくる背景にも、そういう信仰を想定すべきじゃないかなと思っています。



北川 央氏

僕は平野を熊野信仰という側面からもう一回見直してみたいと以前から思っていました。地元の人だけではなく、遠隔地から信仰のため、お参りにやって来る、参詣に来るという要素も持った土地柄だったんじゃないかと。そういう視点で平野を見直したら、いろいろわかってくると思うと思っています。

武将の話というと、杭全神社に関して僕はあまりよく知りません。大坂の陣のときに平野は甚大な被害を受けます。冬の陣のときには町全体が焼き払われたんですね。今日は、東西両末吉すえよしさんや辻つじさんと七名家しちめいけの方もお越しいただいているんですけども、西の末吉さんは、徳川家からの朱印状を平野へもたらす役割を果たされまし

た。また東の末吉さんは大坂城に連れて行かれて監禁されるという事態にも遭いました。平野自体は大坂の陣の渦中で、豊臣と徳川のせめぎ合う場所でしたので、秀頼からも禁制が発給されるし、徳川家康・秀忠からも禁制が発給されるという大変な巻き込まれ方をしました。杭全神社も全く無縁だったとは思いませんけれども、杭全神社に関して何か逸話があるのかどうか、残念ながら私は存じ上げなくて、もし藤江宮司のほうで何かそういう大坂の陣で杭全神社が大変な目に遭ったとか、誰かが戦勝祈願をしたとか、そんな伝承があったらお聞かせいただければと思うんですけども。

藤江：連歌所や多くの社殿が焼き払われたという以外には聞かないですね。

鶴崎：来年（2009年）のNHKの大河ドラマが直江兼統なおえ かねつぐなんで、ちょうどそのあたりですよ。

北川：直江兼統に関して言うと、末吉さんのところに直江兼統の手紙があるんですね。これは兼統の主人である上杉景勝うえすぎかげかつが豊臣政権に巻き込まれていく、ちょうどそうした時期に出された非常に重要な文書で、直江兼統が上杉領国内で末吉家の交易活動を認めるという内容です。平野の町人が上杉領国内で自由に商売できるようになっていくんです。大河ドラマ「天地人」で注目される資料になってもおかしくないものです。

鶴崎：それは是非教えていただきたいです。といいますのは、直江兼統は連歌をする武将なんです。直江兼統は上杉氏に仕えていました。上杉氏は、皆さんご存知のように、越後の戦国大名です。そして秀吉の命令で会津に行くんです。会津では百二十万石となるんです。ところが関ヶ原の合戦いしだ みつなりで石田三成に味方して米沢に移され、三十万石になってしまうんです。そして、その上杉氏は大坂の陣のときは大坂へやって来て活躍するんです。兼統はその上杉氏に仕えている家臣ですから、実によく連歌をしているんですよ。そして武将というものは連歌しながら団結力を養ったりしていくん

です。だから、私はこの11月に連歌の関係で、高橋先生ご出身の山形へ出かけることになるんですけれどもね。今のお話を聞いてぜひまた機会があったらどうぞよろしく。

北川：東末吉家・西末吉家両方にそれぞれ別個に書状が来ていまして、上杉領国内で商業活動を自由に行なっているという内容ですので、既にその時点で東末吉、西末吉の両家が別個に商業活動を展開しているということもわかるんです。東末吉家については「越後分国中諸関往還」の自由を保障しているのに対し、西末吉家については「分国諸浦について往還」の自由を保障していて、両家に対する内容が異なっているのが興味深いところです。のち西末吉家は朱印船貿易しゆいせんで大活躍しますが、既にこの頃から西末吉家は海運が中心だったんですね。

鶴崎：全国の武将からはなにかと注目をされている場所なんですかね。

北川：そうですね。やっぱり平野の商人の持っている実力や活動の内容というのが注目されていたんだと思います。

藤江：さっき、杭全神社に戦勝祈願がなかったかと聞かれましたけれども、そういった頃の物は神社に残っていないんですね。というのは、その当時は神仏習合しんぶつじゆうごうで、境内にあったお寺の十二坊の別当なり社僧なりがお守りをしていたのですが、仮に戦勝祈願があったとすれば、その人たちが受け、また記録もされたんだろうと思います。その記録というのは廃仏毀釈はいぶつ きしやくのときに一切処理されてしまって、こちらには残っていないんです。あるとすれば、七名家の文書とかそういうところには含まれているかもしれないです。

内田：実は僕はまだ聞きたいことをあと10ほど用意しているのですが、いったんここで区切らせていただきます。先生方、ありがとうございます。

3. 後半の部

内田：それでは、「杭全神社と平野のはなし」の後半の部を始めさせていただきたいと思います。

さて、先ほど前半の部の最後で申しましたように、あれを聞こうかこれを聞こうかと列挙していたら10ほども聞きたいことがありまして、これが山積みになっているんです。ただ、「杭全神社と平野のはなし」というタイトルをつけてしまいましたので、後半は杭全神社を中心として、平野の町の話とも絡めたお話を伺いたいと思います。

留学生の皆さんは平野の町の中を歩いて、杭全神社にも来て写真を撮っているようなんですけれども、僕の個人的な感想では、神社と町のつながりといいますと、一番大きいのはやっぱりお祭りかなと思うんです。そこで、杭全神社のお祭りということについて、また先生方にお話を聞いてみようと思います。



内田吉哉氏

杭全神社でやるお祭りにはいろいろあるんですが、留学生の方もいますから神社でやるお祭りについて少しかみくだいて説明しますと、お米をつくる農業にちなんだお祭りというのが大事なお祭りになっているんです。農業ですから田植えをするときのお祭りですね。春に稲を植えるときのお祭り、これがひとつ。それから秋になってお米ができて収穫するときのお祭り。この二つが神社のお祭りとしてはとても大きなお祭りになっています。ですから春のお祭りと秋のお祭りというように、神社ではすごく重要なんです。

それで、杭全神社では春のお祭りとして御田植神事、つまり田植えのことをやるお祭りというのがあるんですけれども、私たちの関西大学で民俗

学を担当しておられる黒田一充先生（センター研究員）からお話を聞きまして、杭全神社のお田植神事というのはものすごく珍しいお祭りだそうです。お祭りのときに田んぼを耕す動作も入るんですけれども、何か小さな人形が出てきて、その人形に何かおしっこをかけるような動作が入るといのがあって、その小さな子供の人形を使うというのがとても珍しいんだということなんです。そこで、先生と話をしている思ったんですけど、そういう人形を使う仕草というか、ああいうのはどういう意味があるのか、伝わっているものはあるんでしょうか。

藤江：解釈については、神様の依代よりしろだというような説を立てられる方もありますけれども、特に神社としてその人形に役割を背負わせているわけではないんです。その辺は学者先生のほうがお説をお持ちなんじゃないかと思うんですね。

北川：僕は、こちらのお田植神事を残念ながら拝見したことがなくて、また一度拝見したいと思うんですけれども。詳しくはわかりません。

内田：ほかの神社でも、ああいう人形を使われたりしているのはご存じですか。

藤江：緊張する場面と緊張を解く場面が、大体そういう神事には用意されているんですね。おしっこをさせたり、御飯を食べさせたりというのはおそらく緊張を解く場面で、もどきの部分だと思うんですけれども、太郎坊・次郎坊を神様の依代とするという説を耳にしてからあまり信念を持って語れなくなってしまったんですけれどもね。太郎坊・次郎坊という呼び方をするんですね。それで、やっぱり生産の儀礼ですから、子供にはこれから将来を担っていくという役割を背負わせているんだと思います。うまく神様のことについては解釈を加えられないですけど。

御田植神事について確かなところをひとつ言えば、もともとは1月13日、小正月の予祝行事です。それが、宮座を組んでおられた方たちのご都合で、4月13日に、3ヶ月繰り下げて今は実施

されているんですけれども、もともと神社のほうは奉納を受けるという側の立場で、あくまでその主体は宮座のほうにあったわけです。宮座で一番中心を勤めていただいていたのが西の末吉家でございます。

内田：そうしますと、例えば人形に御飯を食べさせたりという所作をやる役割の方というのは、例えば宮司さんですとか^{ねぎ}彌宜さんではなくて。

藤江：シテの方がされる所作なんです。太郎坊・次郎坊は、どういう役割なんだということはおそらく西の末吉家のほうには解釈が伝わっているかもわからないです。私たちは見て感じるだけですのでね。そういうところはちょっとよくわからないですね。

内田：お祭りの仕草とかを事前に練習とかなさっているんですか。

藤江：今は、保存会がありますから事前に準備しております。昔、先代の末吉^{かんしろう}勘四郎さんに聞いた話ですと、「六歳のときからわしは面箱持ちをやってこのお祭りを奉仕してきたんや」と。何ていうんでしょう、一生の自分のつとめる業としてですかね、「子供のときからお父さんやおじいさんの背中を面を持ってついて歩いてた」とおっしゃっていましたね。

内田：ちょっと御田植神事でこれ以上ってというのがしんどくなってきたんですが、もう一つ。平野は夏のお祭りが有名だということを伺っています。僕たちの研究センターでは、大阪の夏祭りカレンダーを作ったんですけれども、大阪の夏祭りといってもたくさんありますから、全部を一つのカレンダーに入れるのは無理だということになりました。「じゃあどうやってカレンダーに載せるお祭りを決めようか」となったときに、「やっぱり何か特徴のあるお祭りがいいだろう」ということで、平野の夏祭りというのは幾つかおもしろい特徴があるというので、私たちのカレンダーに入れさせてもらったんです。

それでひとつには、平野の夏祭りには、難しい言葉で言ったら神仏習合の名残が残っているというのがありまして、つまり本来神様が乗っている御神輿が、神社を出てお寺に行ったりとかなさっておるんですよ。それと、だんじりが出るんですけど、これが別名「けんか祭り」と呼ばれるぐらいで、ちょっと遠慮することもあるぐらい激しいんだと聞いております。

それで、以前にも藤江先生にちょっとお伺いしたんですけれども、杭全神社さんの大門の根元にちょっと継ぎ足した跡があって、「お祭りのために高さを上げてあるんだ」というお話を聞かせてもらったんですが、その辺をもう一度お聞かせいただきたいと思います。

藤江：第一殿のご祭神は^{すさのおのみこと}素戔鳴命、^{ごすてんのう}牛頭天王なんです。お祭りそのものは祇園祭と同じなんです。だんじりが出るので、「だんじり祭り」と最近では言われていて、岸和田のだんじり祭りと一緒になっているんですけれども、同じだんじり祭りでも大阪の市街地の部分は夏祭りが多いです。岸和田なんかは9月・10月にやる秋の祭りなんです。農村部は秋の収穫にあわせたお祭りで、町の中は京都の祇園祭と一緒に、やはり病を静めるために、夏の6月・7月の食べ物腐ったりする時期にやっているというところが違うと思うんです。それで、京都もそうだったんでしょうけれど、崇り神がもたらすというはやり病を静めるために、民衆が知恵を絞った効き目のある方法が夏の祇園会です。神さんの気持ちを慰められるぞ、というのがだんじりであり、^{だし}山車であったわけですし、そのだんじりを使って町中でずっとにぎやかして神さんの前に引いてくる、これがだんじり祭りなんです。それで、「じゃあ神さんはどこにいらっしゃるんだ」というと、普段は森の奥におられるんだけれども、お祭りの時には御神輿に乗って町の近くへ出てこられるよと。「じゃあ神さんがせっかく出張してきていただいたその前をにぎやかにするために、鐘や太鼓をたたいてにぎやかにしましょう」というのが夏祭りの形なんです。



熱心に聞き入る参加者

京都の場合は四条に御旅所^{おたびしよ}というのがあって、そこへ山車を出しますけれども、平野の場合はいま神社の入り口の鳥居が立っているところの、ちょうど国道のある場所に御旅所というのがあって、そこに御神輿にお乗せした神様を運んで行在所^{あんざいしよ}をつくって、その御旅所で夏祭りをしていたわけです。それで、国道が通るということになって、そのお旅所が国に没収されてできなくなったんです。その後、「じゃあ今まで置いていたおみこし今度はどこへお祭りするねん」ということで、しばらくは国道が削った後に三角形の小さな土地が残ったんで、その小さなところでやっていたわけですが、やがてそれもできなくなったということで、神社の拝殿に神輿を置いてやるようになったんですね。そうすると、今までは国道のところまで持ってきてお祭りができたものを神社の奥までだんじりを引き入れなきゃいけないということになって、それでそこにその門があったわけです。その門は、ちょうど国宝になる鎌倉時代の建造物で、国のほうから、「これは国宝にするぞ」というお達しが出ていた、そういう文化財だったわけですが、その門はだんじりを通すには低すぎたわけです。町の人、祭りをするために高さ^{かさ}を上げて、「だんじりが通れる高さにしまえ」ということで、それで国宝に指定されるのを振ってお祭りのために改造したわけですね。「今の形でもじゃあないから国宝にしようか」という話は文化庁のほうでありまして、それほど貴重な建物であるということなんですが、町の人にとってはそれよりも貴重な祭りだということですね。

内田：国宝になるのを蹴ってでもお祭りを優先するというのが、何となくわかるような気がします。僕は大阪出身じゃないんですけども、ここの研究センターに入れてもらう前に、何ヶ所かで高校の講師をやったことがあるんです。北摂の高校で一回やったことがあって、南とまでは言えませんが、上本町あたりの高校でもう一回やったことがあって。上本町あたりの高校だとやっぱり、遠くは奈良からも来ますし、河内や和泉といった、南大阪のほうからも高校生がワッと集ってくるんです。それで、北摂の高校ではあまり起こらなかったんですけど、南のほうの高校では、秋のお祭りのころになると高校生が勝手に休むんです。「何で休みやねん」って聞いたら、周りの生徒が、「あいつは今日は祭りやから来えへん」とか、「こいつは来週祭りやから来ない」とかいうように、学校の勉強よりもお祭りを優先するというようなところがあったりしました。それとさっきの藤江先生のお話とを比べると、確かに学校の皆勤出席を逃してでもお祭りに行くかもしれないです。大学でもそうなんです。私たち関西大学の同級生でもお祭りの時期になったら毎日朝からべろべろに酔っ払ってやって来ているやつがいて、そのうえ早退して帰っていくという状態なんです。

僕はもともと大阪で高校生活を送っていないから、ここは平野で高校生活を送ってこられた北川先生に、どんな感じなのか聞いてみたいと思うんですけども、北川先生もやっぱり祭りの時期になると、高校の授業を蹴ってでもお祭りに行くようなことをなされていたんですか。

北川：僕は、今日も来られている関西大学の藪田先生（センター総括プロジェクトリーダー）と同じ小学校で、藪田先生は私の先輩になるんですけども、僕の出た松原市立^{えが}我小学校というのは、江戸時代でいうと、別所村^{べっしよ}・大堀村^{おほり}・若林村^{わかばやし}・小川村^{がわ}・一津屋村^{ひとつや}という五つの村落で学区になっているんです。それで、僕が小学校のときは、例えば大堀が祭りのときは大堀の人間は休みです。それぞれのクラスにももとの五ヶ村から来ているんですけども、その日はどのクラスも大堀の人間だけいないのです。でも授業は行われている

んです。それで、別所が祭りのときは、「別所の人間は今日は祭りやからおらへん」ということで、それが学校で承認されていました。田植えとかでも、「今日はうち田植えやから休む」と言うんです。それで中学校のとき、校舎から見ていたら、隣の田んぼで同級生が田植えをしていました。そういう時代だったので、祭りの日に学校を休むことは当然だったんですね。ただ、僕らは平野の高校に来ていましたけれど、この杭全神社の氏子ではないので、この神社が祭りだから休むというのはありませんでした。とにかく杭全神社の祭りは規模がでかいので、祭りのときになったら道も全部とまってしまう。ですから祭りがいつかということは強く意識していました。



なごやかな鼎談

内田：僕のイメージでは、教育大平野というのは進学校で、普通は優等生が来るものだと思っているんですけども、やっぱり平野で休んだりする同級生とかはいなかったですか。

北川：僕らの附属平野は、平野にあるんですけども、案外平野の地元の人には少なかったんです。クラスにはほとんどいなかったと思います。みんな南海の平野線とか、国鉄の関西本線などで割合遠くから通っていたので、杭全神社の祭りに参加するような平野の地の方は、僕の同級生には誰もいませんでした。だから、見る側でしたね。

内田：今、お話に出ました南海平野線のどん詰まりの平野駅がちょうどここにあって、ものすごく特徴的な六角形の駅舎だったんですね。それで平野線がなくなるときにそれを惜しんで、町づくりを考える会を発足したと言われていたんですけども、

以前今回の準備のために伺ったときに、藤江先生はそのころちょうど東京で大学生活をしていた為に、あまりそのあたりはご存知なかったそうなのですが。ほかの先生方はどうなんでしょう。平野線や平野駅の思い出とかはございますか。

北川：僕はさっきも言いましたように、高校の同級生の多くが南海の平野線を使って通学していたんです。僕自身は大阪市バスで流町と川辺の間を通学してまして、自分だけ南海の平野駅へ行く前に同級生と別れて、市バスで帰るとするのが本来の通学ルートなんですけど、みんな南海平野線で帰るんで、ほとんど毎日のように皆と一緒に南海平野駅まで行ってたんですね。関西線の平野駅は平野郷の端になるので、南海の平野駅こそが本当に平野の駅だという感覚を持っていました。

僕は、子供のころには国道25号線が旧の国道309号線と交わるあたりでバスを降りて、商店街に買い物に来ていたんですね。全興寺さんのお不動さんに水をかけて、そこからずっと奥まで行って、突き抜けたところにあったお店でよく冷やしあめを飲んだ記憶があります。この前天満橋から歩いてきたウォークイベントのゴールが大念仏寺で、ゴールイベントにご出演いただいた講師の旭堂南陵さんきよくどうなんりょうと一緒に「成金堂なりきんどう」というお好み焼屋さんに入りました。あの「冷やしあめ屋はどうなったのかな」と思って、「昔この辺に冷やしあめ屋さんありましたよね」と言いましたら「うちなんです」とおっしゃって、「うちの冷やしあめでそないに大きくなってもらたんですか」と言っていたいたんです。ですから、商店街を抜けると、突きあたりに冷やしあめ屋があって、そこから左に行くと向こうに南海の平野駅があるというのが子供のころからの平野の強い印象でした。

だから平野線がなくなるのはすごく寂しくて、当日に高校の同級生と一緒に来ました。谷町線の天王寺からの延伸と抱き合わせというか、そのかわりになくなっちゃったんです。南海の平野線のように地上を走っている電車だと周りの風景が見えて楽しいんですけども、地下鉄で来てしまうと全然風景なんか関係ありません。今ではすっか

り平野は、僕にとって通過駅になってしまいました。

内田：先ほど休憩時間に藤江先生とちょっとお話をさせてもらって、昔は平野の町の中にもっとたくさんいろんな種類のお店屋さんやお仕事があって、大変にぎやかだったんですけども、ある留学生の人が、「大阪というのは騒がしいイメージだったけれども、こんな静かな町があるんだなと思った」という話をされたので、藤江先生は、「今でいうとそう見えるのかな」と、ちょっと感慨深げでした。やっぱり昔の物の本とかを見ますと、平野というのは昔から町でしたから、平野の名産と言ったら、木綿があったり飴だとかお酒だとか、割にそういう商業製品が書かれたようなことがあるんです。今古いお店もまだ大分残ってはるそうなんですけれど、どういうお店が昔あって今はないんでしょうかね。

藤江：なくなりましたね。多分この中の皆さんのほうがよくご存知だと思うんですけど、私らが子供のときは、鍛冶屋があってそれから傘屋、下駄屋、提灯屋、すさ屋、氷屋、みんな専門店でしたよね。さっき杭全神社は神様のデパートだと言いましたけれども、平野の町全体でデパートだったんですね。あらゆる専門職は多分そろっていたと思うんです。だから、周りの喜連瓜破きれりわりや中河内のほうから、また南河内のほうから、「平野の町に行けば何でもそろうよ」ということで、南海電車のターミナルも本当に混んでいましたし、公設市場前のバスの停留所なんかもいつも人がたまって、本当ににぎやかな町だったんです。バスも、みんなその当時は平野を経由して八尾方面や河内方面などあっちこっちへ行っていました。大阪市バスは川の手前までしか行かないものですから、川を越えるのは近鉄バスしかないんですね。だからみんな平野へ集ってきていたんですね。つい最近なくなって気がついたのは「明徳堂めいとくどう」といって、さし・ます・はかり、何でも測るものは揃う店があったんです。そのつい前にはロープ屋さん。それしか売っていないんですけども、店の中にはあらゆるロープがそろっているという、そういう

お店がなくなりましたし、随分専門店がなくなりましたね。

北川：まさにそういう感覚だったので、僕らも買い物に行くといったら平野だったんですね。今日ちょっと持ってきたんですけどね、私は以前「月刊大阪人」という雑誌の編集アドバイザーをしておりまして、その雑誌で「平野郷を遊ぶ」という特集を組んだんです。すると、近年では考えられない売れ行きを示したんですね。すぐ初版が完売してしまっただけで、そのときの裏話をすると、この特集を組むときに、編集委員会では「平野は大阪の下町や」と言って、「下町特集という雰囲気の特集を組もか」という案が出てきたんです。私はさっき藤江宮司がおっしゃったような感覚です。僕ら河内の農村に生まれ育った人間からしたら、平野っていったらすごくまぶしい町だったんですね。だから「下町ってというのはそれはちょっと違うで」と反論して、編集委員会で随分やりとりをしたんですよ。でもみんなは、「下町や下町や」と言って、なかなか納得しないんですね。

繰り返しますけれど、僕らからしたら平野というのはものすごい都市だったんです。ここへ来たなら何でもあるし、とにかく買い物に来るのが楽しい町だったんですね。だから、「下町」っていう感覚には本当に驚きました。たぶん、かなり怒った表情で、むきになって反論していたと思います。

内田：それでは、北川先生がきれいにまとめていただきましたところで、杭全神社と平野の話をもてたくお開きにさせていただきます。先生方、ありがとうございました。

4. 閉会

内田：これをもちまして、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター地域連携企画第4弾「平野をさぐる」の閉会となりますが、閉会のごあいさつを当センター総括プロジェクトリーダー藪田貫より一言申し上げます。

藪田 貫（センター総括プロジェクトリーダー）：

どうも、本日は足元の悪い中お越しいただきましてありがとうございました。藤江宮司さんにはお忙しい本業がある中を、我われの催しにつき合ってくださいまして、ありがとうございました。

地域連携企画に今回、留学生の人たちに参加してもらおうというのは、起死回生のアイデアみたいなどころがあります。当初から予定していたわけでもありませんし、文部科学省に申請した書類にも書いてありません。

実は、私自身海外に行くことが多いのですが、海外に行ったときに、ガイドブックに書いてあるところに連れて行ってもらってもあまり感動しないんですね。「書いてあったとおりだ」というぐらいで、悪ければ「書いてあったこととえらい違うな」という。ところが、ガイドブックに書いていないところに連れて行かれたときの感動というのは、ちょっと得がたいものがあります。

昨年11月、ドイツのデュッセルドルフというところに行きました折に、その近くでクリスマス市をやっているからといって、知人に連れて行っていただきました。近くにローマの遺跡のある小さな古い町でしたけれど、そこでのクリスマス市は生涯、忘れないだろうと思います。ホテルに帰ってガイドブックを見ましたけれども、それについてはなにひとつも載ってありませんでした。

先ほど僕はアレックス（アレクサンダー・ブシェー）としゃべっていたんですけども、彼は日本語をアメリカで勉強しており、大阪のことも調べてきたみたいで、お笑い・コメディ・たこ焼き、それに賑やかな町だということを知っておりました。けれども、「平野は知らなかった」と言います。英語で書かれたどのガイドブックを調べても、おそらく平野は載っていないと思います。ですから、彼らにとってみれば、全く情報のない

中で、平野に足を踏み入れたんです。それでいて感動を覚えたということは、この町が持っている魅力の大きさのせいだと私は思います。



藪田総括プロジェクトリーダー

外国人といいましょうか、旅人というのは意外と素直なもので、例えば京都なんかもそうですけど、どれだけたくさんの方が来て、どれだけたいそうに書いてあっても「その程度か」と思う人もいれば、何も書いてないところでもすごく感動するところがあります。とくにガイドブックに書いていないもので大切なのが、地元の人々が醸し出す「風情」なんですね。これだけは金閣寺へ行っても、京都の町の中を歩いても、ガイドブックには書いていないんですね。その風情を、彼らは平野という町に来たことで感じ取ったのだと思います。これは、われわれ日本人がもっと大事にしなければならぬものであって、われわれ自身がたっぷり味わいながら、次の世代へバトンタッチしていかなければならないものではないかと思えます。高橋センター長が、「文化遺産学」というものを大阪で立ち上げられましたけれども、そういう中で一番、狙っておられるところは、そういうものだというふうにも思えます。そのことがお互いに理解し合えたという点で、今回の企画は大成功だと思います。

先ほど、アレックスに「このアイデアどうだった」と聞くと、「大変よかった」と褒めてくれましたので、これを機に、外国の人たちとも大阪で交流する機会を増やしていきながら、地域連携を発展させていきたいと思えます。本日は、平野の方々にはたいへんお世話になりました。ありがとうございました。

講師紹介

藤江 正謹（ふじえ まさのり）

杭全神社宮司。平野 HOPE ゾーン協議会役員。杭全神社連歌所の再興に尽力し、1987年に平野法楽連歌をスタートさせる。論考に「杭全神社の月次法楽連歌会」（『アジア遊学 95 和漢聯句の世界』、勉誠出版、2007年）などがある。

鶴崎 裕雄（つるさき ひろお）

帝塚山学院大学名誉教授。センター研究員。文芸作品を史料とした日本文化史研究のかたわら、連歌の実作にも従事。『新修大阪市史』『和歌山県史』など多数の自治体史にも執筆。著書に『戦国の権力と寄合の文芸』（和泉書院、1988年）、『戦国を往く連歌師宗長』（角川書店、2000年）、『連歌招待席 三吟集うばつくば』（和泉書院、2001年）などがある。

北川 央（きたがわ ひろし）

大阪城天守閣研究副主幹。センター研究員。織豊期政治史・近世庶民信仰史を中心に、幅広い研究活動を展開している。著書に『大阪城ふしぎ発見ウォーク』（フォーラム・A、2004年）、『おおさか凶像学』（東方出版、2005年）などがある。平野との関わりも深く、『平野区誌』（平野区誌刊行委員会、2005年）では編集委員をつとめた。

スピーチ

留学生の見た平野

[司会]

石本倫子（センター リサーチ・アシスタント）

石本：今日は、この会場に9名の留学生が来てくれています。この9名が、平野に来るのは実は2回目になります。先日は、総勢28名の留学生と一緒にこの平野に遠足にまいりました。そのときには、ただ町を歩いてもらうだけではなくて一人一人に小さな簡易カメラを配りまして、思い思いの写真を撮ってもらいました。そして、その中から自分が一番よいと思った写真を一枚選んで、コンテストに応募してもらいました。

参加した留学生のほとんどが日本に来るのは初めてでした。関西には京都や大阪などいろいろな観光地がありますが、今回は、生活の場として大阪とその歴史を肌で感じられる場所ということで、ぜひこの平野の町を歩いてもらいたいと考えて一緒に遠足をしました。

それで、今日再び平野に来てくれたこの9名は、もう一回平野を歩きたいという平野ファンの留学生です。今日は平野を歩いて感じたこと、写真を撮りながら思ったことを一人ずつ日本語で頑張ってスピーチをしていただきたいと思います。

1. セシル・ブルー



こんにちは。日本語、ちょっと間違ってもわからない。セシルです。パリに住んでいます。私の専門は映画です。マスター論文を書くために日本にいます。巨匠黒澤の映画について書きます。よろしくね。私の写真は、「フォールディングスクリーン」です。ありがとう。

2. マリア・ゲーデ



こんにちは。私はマリアです。私はデンマーク出身です。専門は社会学です。マイピクチャーは大阪の道、ストリート・オブ・オオサカ。私は、この写真を選んだ理由は、すべての人に関係がある

写真だと思ったんです。

3. アレクサンダー・ブシェー

こんにちは、皆さん、私はアレックスです。写真についてどうもありがとうございます。私の写真は特別じゃない。僕の写真は普通の写真、日本はそのままで特別です。僕は日本が好きです。ありがとう。



4. ファイーザ・ブッダール

私はファイザです。21歳です。私はパリに住んでいます。私は映画の勉強をしています。日本語と日本の文化を勉強するために日本に来ました。北野武の映画について、マスターの論文を書きたいです。私の写真は上手です。ありがとうございました。



5. アントニー・リエベン

こんにちは。アントニーと申します。フランスから来ました。日本語と韓国語を勉強しています。この私の写真は、私が撮った写真の中で一番きれいだと思います。なぜなら、ほかの写真は私の指がカメラの前に入ってしまったから、それだけ。よろしくお祈いします。



6. 柳知賢^{ユウチヒョン}

こんにちは。韓国のソウルから来ました柳知賢と申します。機械工学をもっと勉強するために日本に来ました。若い人などで、にぎやかなところしか行ってなかったんですけど、ここ平野に来て特に大念仏寺が本当に落ち着いて、もう一回来たいなどと思って今回参加させていただいたんです。それで、また来たいんですよ。よろしくお祈いします。



7. 韓一瑾^{カンイツキン}



皆さん、こんにちは。私は中国北京外国語大学から参りました韓一瑾と申します。私は25歳です。まず、今回の平野の見学にお招きいただいた関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究中心に心から感謝いたします。

本物の日本に触れること、これは私が日本語を学び始めて以来、ずっと抱いていた長年の夢だったのです。できるだけ多くのところへ行って、さまざまな日本文化を味わうことは私の留学目的です。大阪というと、東京と同じような国際都市という印象を持っていました。にぎやかな商店街、たくさん的高層ビル、速い生活リズム、それが大阪だと思っていました。「大阪の古い町で暮らしている人々の生活態度とは一体どういうものか」「大阪は、日本のほかのところと比べて特殊な文化があるか」という疑問を持って、今回の「大阪を探検しよう！」という活動に参加しました。10月5日は一日中、私は平野のお寺、神社、博物館などいろんなところを訪れ、大きな収穫がありました。静かな町、親切な人びと、伝統的な建物、それは大阪文化を伝えてくれました。一昨年前の大阪市の姿を展示するビデオ、古いおまんじゅう屋さん、お寺の法事、それはすばらしく忘れがたい記憶としてしっかりと心にとどめておきます。

最後に、今回の活動を企画してくださった方がたに、もう一度心から感謝いたします。ありがとうございました。

8. ジュリアン・シメオン



こんにちは、皆様。ジュリアンと申します。パリから参りました。パリ第7大学から。2週間前に平野に参加してうれしかったです。写真の対象は杭全神社でした。「平和」というタイトルをつけました。神社の境内を撮ったとき、穏やかさと安全さを感じたきっかけにその写真を撮りたかったです。私にとって、自然と神様は大体同じものです。そういう感じを写真にしたかったということです。平野の伝統的な雰囲気を味わわせていただいて、どうもありがとうございました。

分の願いを神様に祈るところという気がしました。ですから、一つ一つの紐が、一人一人の願いとと思いました。だから、すべての人々の願いが全部叶うようにこの写真を撮りました。ありがとうございました。

石本：ありがとうございました。もっといろいろなことを感じたと思いますが、少し緊張して全部は語れなかったかもしれませんが。会場の後ろに、本日来られなかった留学生の写真とレポートをパネルとアルバムで展示しておりますので、ぜひご覧ください。そこからも留学生の気持ちを感じ取っていただければと考えています。本日は閉会にあたり写真コンテストの表彰式を行なう予定です。留学生も最後までおりますので、ぜひ留学生と話をしていただければと思います。よろしくお願いたします。

9. 宋潤珉



こんにちは。韓国から来た宋潤珉と申します。私は今回が3回目の日本ですが、何か関東地方とか北海道よりこの関西地方がもっと魅力的なところだと思います。まだ、日本語は苦手ですが、もっと頑張りたいと思います。

私の写真は何かお堂の端で、糸で強く縛っていて、なぜそのような糸が縛られているのだろうかと思いました。ふっと思いついた考えが、ここは神社だから、いろいろな人々がここに来て何か自



写真コンテストの様子



留学生への案内チラシ

留学生写真コンテスト

●関西大学賞

「神社—人々が集う場所—」
アレクサンダー・バット

【受賞理由】

彼の写真はアングルのにも技術的にもごく平凡です。ノーマルなんですけど、写真を撮ったときにコメントを書いてもらったんです。タイトルは「神社—人々が集う場所—」。写真の左側が行名録でして、何の何兵衛がどれほど寄附したかということが書かれているものです。そして写真の向こうに映っているのが大門なんです。彼は「古い神社はこうやって地域の人々が支えているんだということであのアングルにした」ということを書いていました。私はそれを読んで彼を関西大学賞にしました。

なにわ・大阪文化遺産学研究センター長
高橋 隆博



●なにわ賞

「多彩」
アレクサンダー・ブシェー

【受賞理由】

彼の作品では、鈴緒すずのおと賽銭箱を撮っているんですけど、そのタイトルに「多彩」というテーマをつけているんですね。我われ日本人は、神社というのは非常に簡素だといいます。ところが彼はそのタイトルとして、神社の非常にシンプルなものに対して多彩というテーマをつけたんですね。それが僕の大変おもしろいと思った理由で、「これは外国人でないといけないな」と思いました。

センター総括プロジェクトリーダー
藪田 貴



● MUSEUM 賞

「人々の願いがすべてかなう」

宋 潤珉

【受賞理由】

MUSEUM 賞ということで、博物館のほうからプレゼントさせていただきました。他にも同じように狛犬を撮った人もいらっしゃいますが、彼が撮影したのは狛犬の足の部分なんです。この神社では足どめの願かけというのがあるそうで、人びとの気持ちというのを非常にクローズアップした写真だと思います。また、写真というのは引き算と言われてまして、テーマを絞り込んでここだという部分をアップで撮るとするのも非常に大切な一つのテクニックであります。そういった引き算でこの神社のそういった非常に象徴的な部分が表現できているのではないかなと思って今回選ばせていただきました。



関西大学博物館事務長

熊 博毅

● 平野賞

平野賞は、当日ご参加していただいた方がたの投票により選ばせていただきました。



「どこまでも続く大阪の道」
マリア・ゲーデ



「Will you find the way to look at this picture ?」
ファイザ・ブッダール



「こまいぬ」
トリンカ・クロフォード

学生ボランティアの声

留学生と平野を歩いて

山口 琴世 (文学部3回生)

私はずっと大阪に住んでいながら、平野には行ったことがありませんでした。事前に平野という地がどんなところかは聞いていたので、なんとなく私の住んでいる地域と似たようなものかなというイメージがありましたが、少し違いました。私の住んでいる枚方^{ひらかた}も平野と同じく、昔の町を残そうとしている運動のひとつで歴史街道というものがありますが、道がきれいに整備されていたりして何だか作られた歴史という感じがしました。平野はそれと違って本当に昔のままという感じで、私も留学生になって別の国に来たみたいでした。留学生の人達も日本とはまた別の国にいるような感じだったのではないかと思えます。

私たちのグループはまず杭全^{くまた}神社に行きました。入り口に大きな楠があって、みんな物珍しげに写真を撮っていました。神社の中の狛犬の足に紐がぐるぐる巻きつけられていて、「何かのおまじないかな?」と思いつつも、その時には結局何か分かりませんでした。10月26日に再び平野へ行った時に、離れて行く人をどこかに行かないように結び付けておいたり、いなくなった人を自分のもとに帰らせる、そういう意味のおまじないだというのをバスガイドさんから聞いて、なぜあんなことをしていたのかがやっと分かりました。あのような狛犬を見たことがなかったので、杭全神社の連歌所と同じくらいあの狛犬も有名になったらおもしろいのにと思いました。

次の大念仏寺に行く途中で道脇にだんじりの倉庫がありました。一人の留学生が「だんじりって何?」と尋ねてきましたが、あまり英語のできない私は「Hirano original festival」としか答えられなかったのが残念でした。

午後からは商店街、環濠が残る公園、「かたなの博物館」、お饅頭屋さんなどに行きました。「かたなの博物館」では、留学生が本物の日本刀を持たせてもらっていたのが結構重たそうでした。最後に集合場所の全興寺^{せんこうじ}に戻ったときに、入り口の横に駄菓子屋さんや駒など昔のおもちゃで遊べる場所がありました。小学生ぐらいの子から大人まで遊んでいる中で、私たちも一緒に遊びました。独楽やケン玉は小さいときに遊んだことがありましたが、久しぶりにすると難しく、留学生と一緒に苦戦しながら遊びました。



同じグループのみんなと私(左から3人目)

平野の町は昔の姿をそのままに、子供も大人も楽しめる場所であり、平野郷として栄えた歴史も深く、留学生も京都や奈良とは違った日本を感じられる場所だったのでないかと思えました。私自身も昔の遊びなどをしてとても楽しむことができ、また違った日本を感じることができました。

留学生と平野ウォークを体験して

原田 恒恵（法学部4回生）

私は今回、留学生の付き添いとして、二回にわたり関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究所主催の平野での地域関連企画に参加させていただいた。私たち日本人学生には、留学生のサポートをする役割が与えられていたので、その地域に関しての知識がある方が当然望ましいのだが、私には全くといっていいほどそれがなかった。知識不足のため、頼れるスタッフになれていなかったことが少し心残りではあるが、留学生たちと一緒に平野のまちでさまざまな新しいことを学べたことは私にとってとても良い経験になった。

第一回目は、センターによって前もって分けられたグループ（留学生、日本人学生、センタースタッフがバランスよく配置されていた）ごとに、一日かけて平野のまちを歩きながら、まち全体を肌で感じると同時に、その三週間後に開催された「平野をさぐる」と名付けられた地域連携企画に展示する写真コンテストの写真を撮影した。



平野に向かうバスで

第二回日の午前中は前回同様、平野地区の散策（私たち参加者はこれを平野ウォークと呼んでいたため、以下、平野ウォークと呼ぶことにする）を楽しみ、午後からは前述した地域連携企画に参加し、そこで写真コンテスト表彰式が

行われた。この表彰式終了後には、入賞者以外にも参加賞として大阪を象徴するデザインのクリアファイルやしおりなどの素敵なプレゼントが渡されたので、惜しくも入賞できなかった留学生たちは喜んでいました。センターの細かい気配りに私は驚いたが、後にそれは日本らしさなのかもしれないと思った。

平野地区は、留学生たちが生活している吹田・千里山の地域とは大きく異なっており、今なお歴史的な建造物、そして古き良き地域社会、地域文化が残されている。恥ずかしい話ではあるが、正直なところ、私は今回の企画に参加するまで平野区がこのような地域を有しているとは知らなかった。もちろん、平野地区を訪れるのも初めてであった。私以外の日本人学生たちにとっても初めてだったようである。このことから、平野地区は留学生たちにとっても簡単に行ける（連れて行ってもらえる）場所ではないということが考えられるので、今回センターによってこのような機会が与えられたことは大変良かったのではないかと思います。

今回の平野ウォークに参加したのは、来日して間もない留学生がほとんどだったので*、平野を特別な地域だと思わずに、大阪の町の一部として自然に受け止めていたように思う。平野ウォークは、遠足のような感じであったので、留学生たちは楽しみながら、日本の伝統的な地域社会や地域文化に触れていた。彼らにとっては何もかもが新鮮だったようで、わくわくした様子だった。写真コンテストを開催するというので、留学生たち一人一人には使い捨てカメラが与えられ、彼らは初めて見るもの、珍しいもの、面白いもの、気に入ったものなど、さまざまなものや風景を次つぎにカメラに収めていた。私の目から見て、彼らはそれぞれ自分なりに平野ウォークを楽しんでいた。また、出会った地域の人々に温かく接していただいたことも彼らにとって良い思い出となったはずである。日本のことをもっと知りたいと願い、日頃さまざまなことに挑戦している留学生たちが、平野ウォークを通して、楽しみながら大阪、平野地区の地域文化・社会に触れることができたという点で、今回の企画は有意義であったということができるであろう。

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究所にとって、留学生たちと一緒に作り上げる企画は今回が初めてだったようであるが、成功したのではないかと私は思う。留学生を招いての企画は、彼ら

の安全確認や、特別なサポート、私たち日本人学生への指導、アドバイスなど、主催者であるセンターのスタッフの方がたにとっては大変なことが多いが、可能であれば、これを機にぜひ年に一度はこのような企画をセンターで実施していただけたらと思う。

最後になったが、知識不足で、少し頼りない私をサポートしてくださり、留学生たちとの楽しい学びの時間を与えてくださった関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター、この企画に協力してくださった全ての関係者、地域の皆様、そしてこんな私を頼りにしてくれ、楽しい時間を共有してくれた留学生たちにこの場をお借りして感謝の気持ちを申し上げたいと思う。

* 欧米の大学の始業が秋であるため、関西大学もこれらの国々からの留学生の受け入れを秋に行なっており、秋学期から関西大学に留学してくる学生が多い。



全興寺の境内でC班のメンバーと(左端が私)

地域連携企画を振り返って

留学生の映した文化遺産

石本 倫子

留学生たちは、予想した以上に遠足や写真コンテストを楽しんでくれた。なによりも、平野で過ごした一日が、彼らのアルバムの1ページになったことがうれしい。そして写真の一枚一枚を眺めていると、彼らの想いの一端に触れるとともに、私たちが失いかけているものに気付かされる。

それは「歴史」や「文化」に対する屈託のない感性である。たとえば雨樋をアップにした写真(写真1)。たしかに先入観がなければ、いったいどんな装置なの



写真を撮る留学生

かと興味をそそられるだろう。私たちには馴染み深い神社の手水所もあらためて見ると、柄杓が整然と竹の上に置かれた様子は、「奉納」の文字まで清廉に感じられる(写真2)。

そして彼らの眼差しの可動域は広い。縁の下の所在ない空間に惹きつけられたかと思えば(写真3)、鳥居と、そこから電線までの空を見上げている(写真4)。ときには空間よりももっと曖昧な、軒下に漂っている空気こそが被写体かと思わせるものもあって(写真5)、まさに縦横無尽だ。

また、境内の樹木や茂みなど、緑の写真が目を惹く(写真6)。「鎮守の森」という言葉を知らずして、聖域の本質を見抜いているように思う。そして、その鋭い感覚は、私たちが郷愁を覚える風景を的確に切り取っている。はたして、これが「歴史的景観」と言われるものではないだろうか。

それはありふれた玄関先であったりもする。考えてみれば、植木鉢の置きかた一つとっても彼らの家庭や故郷とは違うしつらえで、おそらく表札や郵便受けにも無心ではなかったのだと思う(写真7)。そして、私たちが通り過ぎ、忘れ去ってしまうような名もない四ツ辻の静止画には、胸を衝かれる思いさえする(写真8)。



写真1 (撮影：金 東)



写真2 (撮影：セシル・ブルー)

すべての写真を挙げて紹介できないのは残念だが、彼らのファインダー越しに教えてもらったことがある。もっとのびやかに、素直に感じる場所から「文化遺産」を探究すること。そこから始まる研鑽の道は厳しくありたいが、スタート地点への行き方は自由。そういう公正なる寛容さが、私たちにもっとあっていいと思う。



写真3 (撮影: トリンカ・クロフォード)



写真4 (撮影: 張 怡)



写真5 (撮影: ジェシカ・ホートン)



写真6 (撮影: ローランド・ユウタ・ヘンドリクソン)



写真7 (撮影: 周 嬌妮)



写真8 (撮影: 韓 一瑾)

平野の町との関わり

影山 陽子

当センターと平野との関わりは、2006年11月25日に開催した、第3回 NOCHS 文化遺産学フォーラム「まちづくりと文化遺産」に遡る。このフォーラムでは、地域で町づくりに携わっているいくつかの団体の方にお話していただいたが、平野からは「平野の町づくりを考える会（以下、会）」事務局である川口良仁氏にお話いただいたのだ。その次に平野と関わったのは、2007年10月28日開催の地域連携企画第3弾「もめん博物館 in 平野」であった。このときには会の月例会議にお邪魔して、企画案から相談させていただいた。開催場所や当日使用する道具などについて助言をいただいた上、開催場所は全興寺境内をお借りすることが出来た。

会の月例会議は、参加者が自由に企画を持ち寄って、他の参加者から意見を募る方式である。会のメンバーでなくとも、平野で何か企画をしたい人間は誰でも参加できる。「もめん博物館 in 平野」を開催したときだけでなく、その後『オケージョナルペーパー No.6』の作成のため現地調査をしたときなどにも参加させていただいた。いずれのときにも、平野の人情味があふれ、和気あいあいとした、年齢性別関係なく忌憚のない意見が聞ける会であった。

今回の地域連携企画第4弾「平野をさぐる」のために2008年9月下旬に参加した会議では、こちらの説明に対して、企画をもう少し一般向けにしたほうがよいことや、広報の方法などについてご助言いただいた。また平野には古い町並みを見るために外国人もたびたび訪れるらしく、「大阪を探検しよう！」で外国人留学生が町をめぐることについても、すんなり受け入れてもらえた。それだけでなく、「探検しよう！」当日は「平野・町ぐるみ博物館」開催日でなかったにもかかわらず、博物館を開けてくださった方もいた。「平野をさぐる」当日も会のメンバーを何人もお見かけし、改めて平野という町のあたたかさを実感することが出来た。



平野映像資料館の館長さんを囲んで



かたなの博物館にて

人びとの繋がりと文化遺産

内田 吉哉

平野という町は、大阪市内に位置しながら、近世に大坂三郷と称された地域とは異なる文化遺産を形成している。それは、かつてこの地域が平野郷と呼ばれる自治都市であったことに由来する。現在でも平野の地域住民の方がたには、「平野気質」とでもいうべき独特の気質があるように感じられる。

そのためか、平野では私たちが地域連携企画でお世話になるより随分前から、町づくりの運動が活発であった。「平野の町づくりを考える会」の活動は、形式ばった堅苦しさとは無縁の雰囲気で開催されている。その中で私たちが仮に「学術研究」という大上段に振りかぶったスタンスで行事を開催した場合、ともすれば空振りに終わる恐れがあった。

結果として第4回地域連携企画「平野をさぐる」は、地域の多くの方がたに参加していただき、成功を取めたといえよう。その成功には、2つの要因がある。

1つには、「平野の町づくりを考える会」のご協力がある。これまで「平野の町づくりを考える会」には、2006年11月に開催された第3回文化遺産学フォーラム「まちづくりと文化遺産」、2007年10月に行なわれた地域連携企画第3弾「もめん博物館 in 平野」でお世話になった。また『Occasional Paper No.6 もめん博物館 in 平野』を作成する際には、「平野町ぐるみ博物館」の調査もさせていただいた。こうした活動を通じて、今までも平野では当センターと地域住民の方がたとの間に連携がとられてきたのである。今回の企画においても、準備を進める中で「平野の町づくりを考える会」に相談をさせていただくことがあった。堅苦しさ避けるために、私たちが立案した企画についてアドバイスをいただき、他にもポスター・チラシの配布など広報活動の面で便宜を図っていただいた。

もう1つには、会場を使用させていただいた杭全神社が、地域と密接な繋がりを持つ神社であったことが挙げられよう。当センターの研究活動は、寺社に遺された文化遺産の調査を主軸のひとつとしている。その理由は、寺社が歴史的に文化遺産を多く集積してきた場であると考えためである。

寺社における文化遺産の集積は、同時に寺社と地域住民の繋がりくまたの緊密さを意味すると考えられる。杭全神社はまさにその典型である。一例として、毎年7月に行なわれる平野郷の夏祭りくまたで、各町の地車が杭全神社に宮入りし一堂に会する光景が挙げられる。平野の重要な文化遺産である夏祭りにおいて、最大のスペクタクルである地車が、杭全神社の境内に集まってクライマックスを迎えることは、文化遺産と地域住民との関係を極めて象徴的に表わしている。同様に、地域連携企画第4弾「平野をさぐる」でも、当初の心配をよそに多くの参加者に集まっていたことは、杭全神社に平野の文化遺産が集積されていることを裏付けるものであったといえよう。



杭全神社参道

協力者一覧

杭全神社
 全興寺
 平野の町づくりを考える会

珈琲屋さん博物館
 パズル茶屋 おもろ庵
 平野映像資料館
 駄菓子屋さん博物館
 かたなの博物館

ミナミカメラ平野店
 亀乃饅頭（福本商店）

関西大学国際交流センター



杭全神社境内の楠

GUIDE MAP

平野町ぐるみ博物館

発行 平野の町づくりを考える会
 〒547-0044 大阪府平野区平野本町4-12-21
 会費特刊 10,000円(税込) 06-6791-2688 FAX 06-6791-2688
<http://www.omoroide.com>

ひとつひとつの博物館は小さいけれど、
 回り歩いてみるとあちらこちらに
 歴史の面影と伝統が残っている。
 平野は街そのものが博物館だ。

① 平野の町づくりを考える会
〒547-0044 大阪府平野区平野本町4-12-21
会費特刊 10,000円(税込) 06-6791-2688 FAX 06-6791-2688
<http://www.omoroide.com>

② 平野の町づくりを考える会
〒547-0044 大阪府平野区平野本町4-12-21
会費特刊 10,000円(税込) 06-6791-2688 FAX 06-6791-2688
<http://www.omoroide.com>

① 平野の町づくりを考える会
〒547-0044 大阪府平野区平野本町4-12-21
会費特刊 10,000円(税込) 06-6791-2688 FAX 06-6791-2688
<http://www.omoroide.com>

② 平野の町づくりを考える会
〒547-0044 大阪府平野区平野本町4-12-21
会費特刊 10,000円(税込) 06-6791-2688 FAX 06-6791-2688
<http://www.omoroide.com>

① 平野の町づくりを考える会
〒547-0044 大阪府平野区平野本町4-12-21
会費特刊 10,000円(税込) 06-6791-2688 FAX 06-6791-2688
<http://www.omoroide.com>

② 平野の町づくりを考える会
〒547-0044 大阪府平野区平野本町4-12-21
会費特刊 10,000円(税込) 06-6791-2688 FAX 06-6791-2688
<http://www.omoroide.com>

① 平野の町づくりを考える会
〒547-0044 大阪府平野区平野本町4-12-21
会費特刊 10,000円(税込) 06-6791-2688 FAX 06-6791-2688
<http://www.omoroide.com>

② 平野の町づくりを考える会
〒547-0044 大阪府平野区平野本町4-12-21
会費特刊 10,000円(税込) 06-6791-2688 FAX 06-6791-2688
<http://www.omoroide.com>

平野町ぐるみ博物館 MAP(第14版)

編集後記

「関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター Occasional Paper」No.9をお届けします。本書は、2008年10月5日・26日に大阪市平野区で行ないました、地域連携企画第4弾「平野をさぐる」の記録をまとめたものです。

5日は、「大阪を探検しよう！」をテーマとして留学生を平野に案内しました。あいにくの雨でしたが、28名の留学生に参加していただきました。当日平野を歩いたときの様子を綴ったレポートをみていると、彼らの新鮮な感動が目に浮かぶようです。ガイドブックにあるような大阪ではなく、〈人びとが生きている大阪〉を味わえる貴重な機会となりました。

26日には、「杭全神社と平野のはなし」という鼎談を行ないました。「歴史」や「文化」といった学術的なものではなく、杭全神社と平野についてのざっくばらんなお話が展開しました。その中から、平野という地域が抱える問題・課題が良い意味で浮き彫りになったと思います。

また、今回の企画では、「異文化交流」を通して平野の文化遺産を考えることを一つの柱としました。留学生が撮影した写真を見ていると、何気ない平野の日常風景がうつし出されていて、日本人とは異なる感性が伝わってきます。まさに多彩な視点で平野という地域を〈さぐる〉ことができました。

地域連携企画の開催および本書の刊行にあたり、快く会場を提供してくださいました杭全神社の藤江正謹宮司、全興寺の川口良仁住職、ご講演してくださいました鶴崎裕雄氏、北川央氏、「平野・町づくり博物館」を主催する「平野の町づくりを考える会」の皆さま、関西大学国際交流センターなど、多くの方がたにご協力を賜りました。この場をお借りして、皆様に心より御礼申し上げます。

(編集 中尾 和昇)

Kansai University Research Center for

Naniwa-Osaka Cultural Heritage Studies Occasional Paper No. 9

地域連携企画第4弾 **平野をさぐる**

発行日 2009年6月30日

編集・発行 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 関西大学博物館内

TEL 06(6368)0095 FAX 06(6368)0092

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/>

E-mail naniwa@jm.kansai-u.ac.jp

印刷所 (株) 廣濟堂
